青鞜

第十一月號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

振替東京二八九一四番

四版

萬葉集選

窪田空穗著　中村不折裝

菊半截約三百頁　四十五錢稅四錢

絹表紙木版彩色　頗美本携帶至便

▲愈々日本民族代表的歌集の新選註完成したり▼

新版

續萬葉集選

窪田空穗著　中村不折裝

菊半截三百餘頁　五十五錢稅六錢

絹表紙木版彩色　頗美本携帶至便

▲氏は浩瀚なる本集中より殊に自己に興味あり集中の心核と思はるゝもの三百餘首を選みて簡單なる評釋を施し感想を附す。絹表紙菊半截の瀟洒なる裝幀。從來讀み方意義の難解なりし爲に惟り專門家の玩賞に止まり、偶解釋あるも精細に過ぎ乾枯に流れ頗る常人に遠き憾みありし本集は此書に依つて始めて一般人に愛誦さるゝを得べし。蓋し萬葉集の如き最も平民的色調に富める歌集は決して少數の學者歌人の所有にあらずしてまさに國民全體の所有と謂ふべき也(信濃毎日)

▲歌に昵む人々にとつては萬葉集の歌の眞情を流露した醇朴さと近代の詩にも讓らぬその人間味とは力強い誘惑力を持つてはゐるがさて二十卷四千の歌數とやゝ難解な煩はしさは一寸近く事を許されない斯ういふ不滿を持つてゐる人は本書について其の心核に觸るがいゝ(大阪毎日)

▲著者は古典の新鑑賞者として當代に類なしその標準の極めて妥當にして藝術上の權威あることとこの小册をして千金の重みあらしむ(讀賣)

▲萬葉集の佳篇を拔き之を假名交りにわかり易く書下し著者の周密なる註解を附したもので萬葉集の一班を覗はんとする者に好適な書である、空穗氏の批評は光つてゐるしかも一方に學究的な忠實さを失はぬ所最もよし(新潮)

▲短歌長歌に對して詳細な註を施したもので萬葉集研究者に取つては缺くべからざる良書である(早稻田文學)

▲今前著の缺を補ふて此續編を成す、集中傑出せる作歌を拔き難解の句には一々解釋も加へまた歌全體の批評を附したれば初學者にもこよなき手引とならう。卷末「萬葉集の中心思想」てふ論文亦有益の文字(秀才文壇)

▲前者「萬葉集選」の便益と眞相とは、既に一部の認めたるところ、此新著亦著者の新しき評釋者としての天才を遺憾なく發揮したり、是には長歌をも採錄せり、附錄「萬葉集の中心思想」はよく情理を盡したり(讀賣)

東京市本郷元町日月社

青鞜

第五卷 第十號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十一月號目次

兒童の世紀（飜譯）……一　山田わか

母の愛（飜譯）……三　らいてう

薄ずゝみいろ（小說）……一七　長谷川時雨

うづ（小說）……二九　荒木滋子

夜から朝へ（小說）……三九　濱野雪

初戀のなりゆき（小說）……五五　岡田八千代

病床相思吟（短歌）……六二　原阿佐緒

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新妻として（短歌）……六四　遠藤琴子
秋　思（短歌）……六六　三ヶ島葭
青鞜詠草（短歌）……六八　諸　氏
戀愛の自由と本能（論文）……七三　山田わか
十月短歌抄（短歌）……八〇　諸　氏
折りにふれて（日記）……八二　岡田ゆき
智慧子夫人の死（感想）……八五　生田花世
戰　禍（感想）……八八　齋賀琴
斷　章（感想）……一〇四　野　枝
編輯後に（消息）……一一四　係　員

振替東京二八九一四番

早大教授 片上伸著

無限の道

（新版）

四六版三百頁布製
箱入著者自裝美本
金九十錢郵税八錢

内容

薄命の中より　ドンキホーテ　生命の培養　活力　無限の道　生きてゐる心持　未知の世界　信ずること　持たぬ寶　天壽　人間の本性　與へる人　二種の新理想家　人間の貴族　思想の力　生みの苦み　破壊と奉仕　何もしないでゐる時　信愛の力　God is the all-fair　純一の詩　ナイヒリスト

自序末節……あらゆる人々は自己を信愛しうる力、人間の本性を信愛しうる力を所有することが出來る。又いかなる人も此力を多少所有してゐない者はない。只人は此力を自ら蔽ひ虐げてゐる。或は自ら所有してゐないと思つてゐる。幸福の泉は實に吾々自らの内にある。生きるといふことは此泉の湧くに任せることである。此泉の水脈の限なきに隨て、湧き立ち溢れゆくことである。私の生命も漸く この限なき道に流れゆかうとするのを感ずる。

▲著者が最近二年間に書いた評論感想を集めたもの、何れも文壇の問題となりたる長編を始め、感想録等何れもよむべきものである。近時論壇の最も注目すべき好著として文藝愛好家の是非一讀すべきものと斷言する（早稻田文學）

▲我等はこの自任ある著者に一片の敬意と信頼の念とを起さゞるを得ない。新文藝新思潮に對する好研究として江湖に推薦したい（ホトトギス）

▲著者の評論の權威に就ては定評がある、眞の生活に憧るゝものは誰れでも讀むべし（東京日々）

▲曾て生の要求と文學の一書に於て、人生と藝術とに對する思索の敬虔誠實なるを示せる著者は、本書に於て一層其歩みを明確に示せる觀あり「生命の培養」「人間の本性」の如き大問題に對する解釋より「南の窓にて」の題下に收められたる斷片的思索に至る迄必ず明瞭なる考察を加へたる所、著者の思想家としての信念を窺ふに足る、廣く一般に勸むるに躊躇せず（萬朝報）

東京市本郷元町日月社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兒童の世紀

山田わか

——エレン、ケイ著——

第一章

兒童の兩親を撰擇する權利(三)

故に社會のかやうな狀態及び人生の眞價値に付いての個人の見解を變更すれば、二十歳乃至三十歳の男女は簡短なる條件のもとに、自身の家庭をつくり、幸福を得る事が出來る。そしてこれは新しい人類を造る最も必要な源であり、又家庭を見る事祭壇の如く、愛の生活を重ずる事、神に奉仕する如き、古代人の感情の復活である。かくの如き狀態になつて始めて社會の最大禍患なる賣婦禁制の實行も期望し得るのである。そして我々は充分なる權利を持つて子孫の完全なる發達に豫先條件である自制を、靑年に要求する事が出來るのである。

今日の狀態に於ては結婚をして居ない、本當に不道德な母達があると同時に、又一方では貞淑な、自分の子供の父に對して純潔なる愛を捧げて居る、けれども種々な事情のためめに公式結婚の手續きを履んで居ない母達もある。そして、たとへ、結婚法が簡單になつて

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も、猶其の簡單な結婚法による事なく、母になる婦人は絶えぬであらう。

ブジエルンソンは性的道德の演説に於て『母態は望むが、結婚は不贊成だと云ふ婦人があるならば、それは差し支へない。子供に對し、母たるの義務を全うしさへすれば結婚を無視して母たるの權利は充分ある』と主張した。

一度、獨逸に有名な事件があつた。それは單なる娘ではなく、充分成熟した婦人であつたのだが、彼女は結婚して間もなく、双方の氣質、及び地位は双方の不幸になる事を發見したのであつた。それ故彼女は忽ち離婚した。そして後に彼女は私生兒を生み、公然と獻身的に敎育した。彼女は彼女自身の職業から、及び母たるの喜びから享有し得る平和と共に、又、娘として彼女自身の親に孝養を盡す事が出來た。けれども、もし彼女が結婚生活を選んだならば、子も親も彼女自身も此の平和と幸福は得られなかつたかも知れない。これは人間生活のさま〴〵な樣式の一例であるが、確かにこれは種々雜多な事情のもとにある人類を、一ツの定まつた型にはめやうとしたり、萬人に對して同じやうな義務の範圍を强いたりする、社會の要求の馬鹿氣て居る事の證據である。

兒童の權利に對する義務の範圍はます〳〵擴がつて行く。此の範圍の境界線は、未來に於ては、現今とは全く異つて引かれるであらう。則ち不調和の結婚に於て子を生んではな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らないと云ふ事が兒童の最上の權利と見られるであらう。故に何よりも先に、先づ結婚は自由でなくてはならない。これは双方合意の上で自由に離婚出來ると云ふ事である。併し結婚するに當つて、或は離婚するに當つても、兒童に對する義務は双方とも負擔しなければならない。かやうな法律上の規定は或る場合には不用であるかも知れない。が又或る場合には最も要用なものであらう。とにかく、此等の規定は、如何なる場合にも兒童に對する義務の發達の障碍にはならない。これに反して今日の强制結婚法は、男に與へられた守護權に關してと同じやうに離婚に關しても、男女共同生活の高尙な發達に障碍物となつて居る。

烈しい力で結婚が成立しても、それが直ぐに兒童養育に適當な家庭とはならない。兒童を保護するに適當な家庭は、誠實な心を持つて結婚する事によつて、殊に兒童に對する深き責任を感ずる事によつて、得らるゝのである。此の責任を感ずることは、結婚生活に不滿を抱いて居る兩親をして、平和なあきらめ、又は高き人格を、保たしむる。彼等は彼等の間に愛はなくとも、兒童の養育に彼等二人の手が必要と感ずる時に、彼等は共同生活を續ける事が出來る。けれども此の解決は眞の結婚生活が續くのではない。唯、親としての職分が殘つて居るだけである。であるから離婚してはならぬと云ふ事は、唯其れが旣でに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

生を與へた子に對し不利益となる場合のみである。心の全く離れた夫婦は決して新しい生命を造り出してはならぬ。

輕卒な結婚は數多いが、輕卒な離婚は少くとも、子供のある處には少ない。此處に制裁力として働いて居るものは、今日に於てゝすら法律の命令ではなく、血の命令である。離婚すべきか、すべからざるかに付いての最後の判決は社會が發言するのでなく、子供が發言するのである。此の子供の利害と云ふ動機は公式の手續きを經た夫婦の間にも亦自由結合の間にも同じやうに確かなものである。もし父或ひは母が子供のために強制的な同棲を續けても、其れは子供のために多大な不利益とはならない。

大部分は、法律によつては定める事の出來ない不文の義務のために要用な事は、父及び母の良心の覺醒を促し、高き道德を創造する事である。恐らくは、これに對して新しい法律が現今に於ては必要である。古びた法律上の概念は取り去らねばならぬ。其れは過去の道德を設立するためには必要であつた。けれども今日猶高き道德を要求する時に當つて其れは邪魔物である。誘惑を事とし、青年子女を墮落に導き、或は他の結婚生活の平和を亂すやうな、かやうな人物は最も悄むべき、最も賤しむべき者として、取り扱はれなければならぬ。相手を征服しやうとする男或ひは女の無情な遊戯的欲望、則ち、全く肉慾的、利

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

己的な要求と、高尙な精神的愛の要求との區別を人が知るやうになれば、其れだけ、道德の概念は、子孫に對する責任の感情と同等なものになる。

本能の刺戟を滿足さす事は、これは自然の本當の深き意志には反して居つて、個人並びに國民を破滅に導くものである。けれども前にも云つた如く、此の本能の刺戟、則ち自然の意志の蹂躪を抑制する事は禁慾主義では出來ない。

責任を離れた、禁慾主義を詩人が攻擊するのは良好な徵候である。けれどもトルストイの如く、肉慾則ち戀愛だなぞと云ふ時には其れは有害である。愛を單なる肉慾に貶下してはならぬ。が同時に、人類を下等な肉慾の抑制から救はうとするならば、愛を唯精神的なものとして靈化してしまつてもならない。であるから此の書の始めに於て、又他の著書に於ても述べた如く、肉慾を眞の愛に迄、美化しなければならぬのである。則ち、肉體美の引力が戀愛に必要な要素である如くに精神的結合、柔和、同情、共同勞働及び友愛が、愛の高尙な情緒及び愛のチャームをつくるに必要な要素である。相互に信賴すると云ふ、豊富な要素が內的に外的に愛の貞節となるのである。

魂の奧の此の靜かな流れは、肉體の美を更にあざやかにする。けれども、公式の手續きを經た結婚であれ、又は自由結合であれ、もし其れが單なる肉慾の引力であり、そして相

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

互に信頼する感情がなかつたならば、其の夫婦は忽ち幸福の泉を涸らし、倦怠をのみ後に殘すやうになる。此の相互を信頼すると云ふ事は靈肉の合致であり、又心靈と同情の結合である。

子供の蒙むる、あらゆる不當な苦痛を除去するのが社會の義務の重なるものであると社會が氣付いた時には、兩親の子供に對する責任及び義務は一層嚴重なものになるであらう。未來の道德は、家庭の神聖を保つと云ふ名のもとに、所謂私生兒を犧牲に供してはならない。其の子供は生來、健康と立派な才能とを具へて居るかも知れない。けれども其の子供は現行法のもとには、不正兒として取扱はれ、其の結果彼は本當の不正兒になつてしまう。そして彼を不正と定めた邪惡な法律に對し復讐の念を燃やすやうになる。子殺し、毒殺、餓死、凡て此等は、此の邪曲な法律上の觀念と關係して居る。けれども、あらゆる此等の結果よりも猶一層有害な事は、社會が其れ等の生理的ではなく、心理的に墮落した所謂不正兒から受ける打擊である。彼等は善良な力を失つて居る計りでなく社會的に破壞的な力を發達させて居る。かのエリザベス女皇暗殺事件が全歐洲を震駭せしめた時に、最も私を戰慄せしめたものは、其の兇行者が『私は私の親に付いては何にも知らぬ』と云ふた事である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たとへ、汚れた感情をもつて人生の神秘に近かづいた男女の間に生れた子ですらも、子供は神聖なものとして見做されるやうな時代が、いつかは來るであらう。其の時には、純なる愛、及び誠實な義務の觀念をもつて子供をもうけた母は矢張り神聖なものとして尊敬されるであらう。

其の時には健康な、相愛する男女から生れ、そして智と愛を加へて育てられた子供は、たとへその兩親が全き自由結合であつたとしても、正兒と呼ばれるであらう。其の時には愛なき結婚の間に生れ、そして心身の悪質を兩親から遺傳して居るやうな子供は、たとへ其の兩親がセント・ピーター會堂に於て、羅馬法皇立會の上盛大なる結婚式を擧げてあるにしても、それは不正兒と見做されるであらう。であるから、たとへ結婚はなくとも輝くやうな健康な子供の優しい母の上には輕侮の影は投げられぬであらう。けれども其の輕侮の影は、祖先の非行の結果、廢頽させられた子(正當であれ、不正當であれ)を持つた母の上にはあびせられるであらう。

有名な『獅子の兒』と云ふ劇のうちに次の對話が老人と青年との間にとりかはされて居る。

老人『此の世紀が婦人の世紀であつたやうに次の世紀は兒童の世紀であるであらう。そ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

して兒童が彼等の權利を得た時に道德は完全になるであらう。其の時に各人は、自分等の生む子供に對して、社會及び法律が彼等に課しつける義務よりも、外の義務のある事を知るであらう。子を持つた男は世界の何處の果てへ行つても彼の父たるの義務から逃れる事は出來ない。王國は與へられる事も亦取り上げられる事もあるであらう。けれども彼の父たる事は永久に彼を離れぬものである事を理解せよ』

青年『承知して居ります』

老人『けれども彼が生んだ子の生命を注意深く保育すると云ふ事だけでは、彼が正義を盡したとは云はれない。どんな人も、もう一つの問題に付いては、どんなに早くから考へても早過ぎはしない。其の問題とは、彼に子を持つ權利があるかどうか、又何時其の權利があるか、に付いてゞある』

此の對話が私に此の著作の書名を與へたのである。そして兒童の第一に享有すべき權利は其の兩親を撰擇するにありと云ふ此の私の斷定が此の著作の出發點である。

自然科學(心理學も含めて)を法學及び敎育學の基礎とすべしと云ふダーウイン派の主張を、我々は第一に此處に考究しなければならぬ。人は自然陶汰の法則を會得し、其の法則の精神に從つて行動をとらねばならぬ。人は社會の制裁を人數發達の助けとなり、自然陶

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

汰の補助となすやうに配置しなければならぬ。そして第一に犯罪の素質の繼續を遮らなければならぬ。犯罪者の特質は專門家によつてのみ鑑定さるべきものだが、併し其の特質が次の時代へ遺傳されぬやうに防止するのは社會の仕事である。さすれば人類は漸々と、かの祖先の惡質が忽然と現れる間歇遺傳の害から救はれるやうになるであらう。これは人類が猿や虎のやうな人間を彼等の中から消滅せしむる進化の第一條件である。然して後始めて、生理上及び心理上、疾病を遺傳されて居るものは、其れを又子孫に傳へてはならぬと云ふ要求が有力なものになるのである。

併し此の遺傳病に關しての諸家の意見は未だ區々である。たとへば結核病に付いて、或る大家は、其れは遺傳病であると主張し、又或る大家は、それは單に傳染するのだと宣言して居る。

故に後者の說に從へば結核病の母が子を生んだ場合に、其の子供を生れるとすぐに其の母から離してしまへば、其の子は安全であると云ふのである。癌腫に附いても結核病と同樣意見は一致して居ない。併しながら癲癇の如き場合に於ては說は確定して居て、既に一定の取締りがもうけられてある。けれどもこれは常に實行されては居ない。梅毒、あるこゝる中毒、及び數多の神經病は確に子孫に遺傳するにも拘らず、未だこれに對する取締り

規則は出來て居らぬ。

生命を授けられたと云ふので兩親に對し、生みの恩と云ふ古い言葉がある。私は私自身の經驗から、私の兩親は强壯な精神と肉體を祖父母からうけついで居た事を知る。が其れは母方の祖先と父方の祖先とが早い正しい幸福な結婚を得て居た事に歸するのである。けれども一般には、兩親は子供を生んだ罪を其の子に詫びねばならぬ場合が隨分少なくはないであらう。

生活難の結果、或は犯罪の結果、沈淪して居る人でも、又は精神病及び其の他の疾病に惱んで居る人でも、或は又精神上の不具者でも其の原因を探つて見れば其れは彼等の出生の當時か又は幼年時代に何にかわけがあつたに相違ない事を我々は信じる。たとへば彼等の兩親があまり若年であつたか、或は老衰して居たか、或は又父か母が病體であつたか、飲酒家であつたか、又は母が烈しい勞働から、或は子供が多すぎる事から過勞して居たか或は愛なき結婚であつたか、それとも亦愛の冷却した後であつたか、とにかく、こう云ふ事情のもとに生み落されたのが彼等の不幸の原因である。則ち彼等は生れる時歡迎されなかつたのである。或は彼等は反抗の感情のもとに、彼等の血の中に人生の不調和と嫌惡とを含んで、生れて來たのである。婦人の嫌人病其の他多くの病的傾向は皆此の原因に歸せ

られるのである。或は又惡い手本の多い家庭、衝突の絶えない家庭で其の影響を受けて育てられた事も其の原因である。

遺傳の此の意味に關する知識は近年大に進歩して、兩親又は祖先より負された惡質を持つ青年は、其の不幸な惡質を子孫に傳へるよりも、むしろ結婚を愼むのが彼等の義務である事を悟り始めた。

私は一人の婦人を知つて居たが、彼女の系統は父方も母方も精神病を遺傳して居たゝめ彼女は、彼女自身は健康であるにも拘らず、愛する男との結婚を抗んだ。もう一人の私の知つて居る婦人は、婚約した男が飲酒家である事を發見したゝめ、彼女も亦其の約束を取り消してしまつた。何となれば彼女は自分の子にかやうな父を持たせたくなかつたのである。婦人が無智の結婚をする結果、世の中に罪を殘すのは殊に此の點に於てゞある。彼等は子供が飲酒家を父にもつたゝめに、癲癇及び其の他の病氣殊にあるこーる中毒症を遺傳する事を知らないのである。若い婦人は、配偶者の特質が自分の子供に遺傳されたのを見る時に其れが大なる喜びであるか、或は非常な苦惱であるかを考へるよりも、むしろ其の配偶者に對して、情が先きだち易いものである。

（未完）

母の愛

らいてう

――ウォードより――

私が今論じやうとしてゐるのは親の愛ではなく、寧ろその屬性の一つで、兩性間のかの肉愛の如く、普通――之れは正しくはないが――「本能」と言はれてゐる母の愛に就いてである。本能といふ言葉をここで何故（なぜ）使ふかといへば、それはこの言葉が肉體と切り放すことの出來ない有機的なそして遺傳的な或ものを意味するからで、この意味に限れば、あながちこの見方も間違つてゐるといふ譯ではない。母の情（マターナルエモーシヨン）と區別した場合の母の愛（マターナルラブ）は、全然父の愛とも親の愛とも異つてゐる。併し一般の人々はいつもこの二つを混同してゐる、否、哲學者でさへ、男性中心説を信ずるものは矢張りさうである。スペンサーは次のやうなことを言つた。

「…………たとへ親の本能は、その根本的性質に於て、助けなき狀態に對する憐憫の情だとしても、男女にとつて共通なものだが、同一なものでないのは明かである。幼兒の助けなき狀態を感ずる親の本能の特殊な形は、男子に於けるよりも女子に於て一層有勢

なのは論ずるまでもない。男子に於けるこの本能は必ずしも常に助けなきものによつて高められるのではなく、寧ろ彼に依り頼む弱者の總べてに及ぶ、もつと一般的な關係を有つてゐる。」

思ふにこれは全く二つの言葉、否三つの言葉――母の愛と親(同族)の愛と同情――の混同である。

母の愛は同情の上に立つものではない、またもし同情がこの中に混じたとしても、それは全く別な、後に附け加へられた要素であつて、その始めに於ては無關係なものである。同情は人間の德性の基礎であり、また他人の苦痛狀態を自身の上に再現しうるのみならずなほまた他人の苦痛を實際自身に於ても一つの苦痛として經驗しうる高尙なる理性の生產物の一つである。母の愛はもと適者生存の法則と、種族の存續及び保護を條件とする利益の法則とを通じて婦人の心に植ゑ付けられた一つの能力であつて、決して助けなき狀態に對する憐憫の情を含むものではない。この憐みの情は理性あるものによつてのみ經驗される。然るに母の愛は動物に於ても見ることが出來る。

といつて、これは何も人間の屬性なる母の愛の美と純と價値とを傷けることにはならない。實に母の愛は人類の屬する一大動物階級なる哺乳類の特徵の一つで、これはまたこの

階級を他の總ての階級から區別する主たる作用卽ち哺乳といふことゝ直接の關係を有つてゐる。哺乳類の全體系は性的體系の一部であつて、母の愛はもと一つの性的屬性なのである。

乳線の中には性的感情の神經が備へられてゐる、從つて子供が乳を飮めば、その神經は興奮して母は强き性的快感を經驗する。これが、動物が子供に乳を與へる價値ある動機でなければならぬ。斯くして子供の生命は保護されるのである。母の愛はかくも性的感情と深き關係を有し、且つそこから發生したものだから、この感情は哺乳類に限られてゐるのみならず、總ての哺乳類に共通である。

母の愛の科學的意義と詩的美とはヘッケルによつて次のやうに言はれてゐる――

「ひとり哺乳類に於てのみ、母の乳をもつて新に生れた子供を養ふことによつて、子供を世話するといふ注意すべきことが一般に見られる。またこゝに種々なる哺乳類の家族生活並に人類の高き精神生活の上に重大な影響を與へたところの母の愛の最高形式の生理的原因も存する。詩人チャミソーはそれについてかう歌つてゐる――

自から養へる子供を愛する母のみ、

その母のみひとり知る、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

愛するといふことゝ、幸福といふことの何たるかを。

若しマドンナが母たるものの子に對する愛の最高至純な典型だとすれば、私共は他方に於て猿の愛の中に、即ち母猿の子に對する烈しい愛情の中にマドンナのそれに匹敵する同じ母の愛を見る。」

母の愛は根本的に保守的原則である、併しかゝる原則も亦活動的、建設的原則のごとく社會にとつて有用なものである。今日まで母の愛は主として種族を保護し、保存する生物學上のものであつて、これを社會力として見れば僅に、消極的な方法に於て働いてゐたに過ぎない。併しそれは時として非常な力を現した。しかも人間のパッションとしての母の愛は多くの悲劇の問題となつてゐる。この力をユーゴーほど正確にしかも力強く描いたものは他にあるまい。彼はその著 Quatre-vingt Treize に於て、次のやうに言つてゐる——

「母たることは何の問題にもならぬ。人はそれを論ずることが出來ない。母をして崇高ならしめるところのものは彼女が獸の一種だといふことである。母の本能は神の如き動物である。母は最早その時一個の婦人ではない、彼女は單に女性である。」

これはいかにも眞理である。このパッションが最高點に達する場合は、女性が、自分自

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

身の最高な保護者であつた動物時代、即ち純然たる女性政治の時代と最もよく一致する場合である。女性は種族であつたばかりでなく、種族によつてなされる仕事の總てをなし、なほその外に男性を選擇した。ひとり母の愛のみならず、母の勇氣、母の能力といふやうなものまでも發達したのは全くこの長い間の訓練の結果であつた。しかも婦人はその後久しく逆境にあつたにも拘はらず、なほ最大な危險に遭遇して、その子供をためらふことなく救ひ出す力を有つてゐる。この母の行爲は屡々奇蹟の如く見える。

思ふにこの母の愛の力も兩性の完全な平等時代の到來と共に、過去または最も進歩せる今日の社會に於けるよりも、更に一層重要な役を演ずべき運命を有つてゐる。そしてもし婦人が藝術に於て、男子と全く平等になつたなら、未來の文學に於て、母の愛はもつとよく描かれ、もつと豐富にされねばならぬといふことを私共は婦人その人に向つて求めねばならぬ。

（大正四、一〇、二〇）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

薄ずみいろ（二回）

奈々子

通り雲がすると日がかげつて、またぱつと秋の日がさす逆上（のぼせ）る日でした。紫の色がいかにもよく美しく見える日で、高いところを揃つて飛んでゆく赤とんぼをわたしは眺めてゐました。一つ二つ群にはなれたのが、水鉢の水を呑みにきたりして髭に結んだ水玉を頭をふるつておとしながら、ついと飛ぶと、揃つてきた仲間の見當を見失つて、藏の黒壁へぶつかつたり、張板へ戸惑ひをしたり狼狽（あわて）るのもありました。わたしは心持ち張ものの薄のりが、手にこわばつて殘つてゐるのを洗はうとすると、つくばゐの水の上を一寸ばかり、飛びもせず動いてもゐないように、羽根のすきだけ細かく風をきつてゐる一羽がありました。ふと子供らしい惡戯心がおこつて、指のさきで輪をこしらへて、水をはじきかけてやると、うすものゝ袖に露のこまかい雫をのせながら、日影を背負て逃げてゆくのが、あんまり美麗なので見ほれてゐますと、お君ちやんが黒ぬりのお盆へまつかな枝柿をのせて、小刀までつけてもつてきてくれました。するとその後から、も一人の妹が何か袖にかくすように抱いて急いできました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あら私のまで張つて下さつたの、随分のぼせたでせう。」と云ひながら、お君ちやんはよく熟したのを一つ剝いてくれました。

わたしが柿をうけとらうとすると、次の妹は、

「おしゆんちやん、もつと好いものよ、もつと好いものよ。」と椽側の板を足踏みして、お君ちやんには見せたくないやうに、袖の中の品に氣がつけといふやうな樣子をしました。

「お君ちやんてしやうがない、おしゆんちやんがどつちがほしいかきめてしまつてから、見せようと思つてゐたのに。」

二人が二人とも柿の方へばかり氣をとられてゐるので、仕方がなさうに袖のなかからだしたのは、緋鹿子のやかま絞りと、紫の痲の葉絞りの、兩方とも二尺からある巾のままのでした。

「大丸からおしゆんちやんの帶と一所に絞れてきたのですつて。紫の方を半ゑりにしますか、緋い方を根掛けにほしいと思ひますかつて。それとも半分づゝお君ちやんと分けますかつて。私は帶上げにもう買つて頂いてしまつたの。」

お君ちやんは緋鹿の子の方を手にとりました。わたしは紫絞りの方をとりました。二人とも同じように襟へあてゝお互に眺めあいました。袷の黒繻子の襟にどちらもよく似合ふ

ので兩方半分づゝにわけて、じゆばんの襟にすることに極めました。わたしは十九になつても年弱なので、緋鹿の子の襟をかけても誰も派手だとは云ひませんでした。自分でも赤い襟をかける妹達と、ちつとも違つた心持ちではなかつてのでした。

それからすこしたつと、私とお君ちやんは現金に、長じゆばんを出してきて、半襟をかけてゐました。どつちからさきへかけようかと迷つたあとで、もしお正月に結綿に結ふかもしれないから、緋鹿の子の方はとつておかうといふことに一致しました。緋ぢりめんの襟裏をつけてくけてゐる時には、霜月の芝居と、お稽古などとの納涙ひや納會のことはかりを思つてをりました。わたしの其時の心持ちは赤蜻蛉の群の一つのようで、妹達と一所にゐて、同じに、一つに集つた樂しみでした。自分だけが仲間はづれになつたら、屹度戸感ひをして狼狽たに違ひありません。

「今日のような日に、栗を拾ひに田舍へ連れてつてもらひたいわね。」

そんなことを云つてゐるときに、お母さんがわたしにだけ用があるとよばれました。

わたしは虫が知らせたのか、其時にお母さんのお供で他所へ出掛けるのを氣が進みませんでした。折角妹達とおんなじことをして、おんなじような氣持になつてゐるのに、わたし一人だけ他所へ連れてゆかうといふのを嬉しくなく思ひました。それにもう午後で、こ

のごろは直に日がおちるのに、何で今頃から盆石の會なんぞへ出掛けるのかと、出不しようなお母さんの日常を知てゐるだけに不思議にも思ひました。小さい末兒までおいて、わたしとお母さんとだけが夕方にかけて出かけるといふのが、何とも云へぬほどお君ちやんたちへも氣の毒でなりませんでした。百方逃れようとしたのですけれど、

「是非私に見てくれと藤井さんの奥さまに賴まれてゐたのだし、井口まで迎ひにおよこしだから行かないわけにもならないし。私にはてんから趣味がないのだから、どうか一所にいつておくれ。」

強てかう云はれると、今までの敎育が嫌と我をはらせないのが習慣になつてゐるので、わたしは意久地なくお母さんの云ふなり次第になつて、納戸色がかつた紫がすりのお召の袷に、黑地でも華やかな大和錦の帶をしめて、前の車にはお母さん、後のには井口が乘つて、私は二人にはさまれて出かけました。

それは盆石の會には違ひありませんでした。が、わたしを連れて出たお母さんの目的は外にあつたのでした。井口といふ出入りの道具屋も迎ひに來たのには違ひありませんが、藤井さんの奥さんから賴まれて來たのでないことが、愚鈍なわたしには察しられました。お母さんと井口とは時間まで極めてあつて、歸りにわたしを知らない人の家に連れてゆき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ました。

わたしは何といふ正直ものでしたらう。十九といふ年を喰つてゐながら、女は他家へやられるもの、それには見逢ひといふことがあるものぐらゐなことは、知つてゐながら、ちつともお母さんを疑らうとはしませんでした。あんまり御不沙汰をしたし、すぐ御近所だから、門口からよつてゆくといふ家の名は、私のちつとも知らない姓名でした。けれど井口もそれがよろしうござりませう、さぞお悦びでせうと云つてゐるので、何の氣もつかずにゐました。門口からといふのを引上げられて座敷へ通ると、暫くたつてから、其家の主婦とは違つた婦人が出てきて、

「丁度よいところでお目にかゝりました。私もあの會を見物に參りました歸りで、ちよいと寄りましたら」といふような挨拶をお母さんと取りかはしてゐました。

其女はわたしも顔は知つた女でした。わたしの家のちき近所の角店の、何の商業なのですか問屋らしい店附きの家で、古い家柄ばかりそろつてゐる町内では新しい住人なのと、派手な、請負師じみた家なのとで、よく家庭の亂脈なことやなにかが他人の口の端にのぼる家の御内儀でした。

主婦の老女の儀式ばつた物云ひや、お辭義とお世辭づくめの井口の追縱（ついしよう）とに、わたしは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一刻もはやく歸りたいと思つてゐました。家へ歸つて御飯をお君ちやんや、おつちやんと一所にたべて、先刻の鹿の子の殘り裂れを、紫と緋とはぎあはせにして、三人の銀貨入れをこしらへようと約束したことを、みんなも待つてゐるだらうと考へてゐました。せまい庭の、板塀の方へ幾段にも棚を釣つて、鉢植物を澤山にしたてゝあるのを厭々しながら眺めてゐたりしました。來逢はしたといふ御内儀とお母さんの咄はいつまでたつても果しがなくつて何か耳のはたで云ふと、お母さんが、

「左樣でございますとも、左樣でございますとも」と頷いて、調子ばかりあはせてゐるのに、わたしは私自身の心淋しいより、家に殘つてゐるものの、待遠しがつてゐるのが目について きて、小さい兒が「母さん」といふのに、お君ちやんがなだめてやつてゐる、夕暮の、まだ燈火のつかない、たゞ〳〵しい室のさまや、早く歸つてきてくれれば好いなあと思つてゐる、皆の氣持ちがひしひしと、黄昏の色とともにわたしの胸にせまつてきて堪られないので、

「お母さん御用があるのなら、私だけ先へ歸つも好いでせう」と云ひますと、

「まあお待ち、私もすぐお暇するから」と云つて、好いからお歸りとはいつてくれませんでした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其うちに御内儀によく似た、背のひくい、大變横ぶとりのした、赤ら顏で白髮の多い、そのくせまだ若いらしい男が出てきて、お母さんに四角ばつて挨拶をしてゐました。

「おしゆんちやん」と、改まつてお母さんが呼んだようでしたけれど、私は歸りたいが一心だつたので、椽側の方からちよいと向直つてお辭儀をしただけで、新來のお客に對しては注意もしなければ好意も惡意も持つてはゐませんでした。時々其男が、妙にいかいかつぱいような咳ばらひをするので、私のぼんやりと考へてゐる魂が、威嚇されたようにびつくりして其方を見ると、咳拂ひをしながら其男は自分の正面にあたつてゐる天井の隅の方を眺めてゐました。何か不思議なものでもあるのかと其方を見ても、天井には變つた節穴もなければ壁に大きな蜘も見えませんでした。

いつの間にかお膳が出ました。すると其男は無言つてお辭儀をして下つてゆきました。あの人は歸るのかしら、あの人を殘しておいて、私を歸してくれれば好いにと思つてゐると、また其男が出てきました。こん度は紋附きの羽織をよして、縞の糸織のつツぱつたのを着てきて、また濟ましてお膳の前に座りました。

をかしな男だと思つてゐますと、主婦が私の前へきて、不思議な御緣だとか何だとか妙なことを云ふので、わたしは何といつてよいのか困つてゐると、

「折角ですから、ほかのものは頂かないでも好いから、嫌ひだといはずに、今夜だけはお蕎麥へ、お箸をつけるまねだけもなさいよ」と小さな聲で云つて、「幾久しく」とか、「何分不束ものですが」とか、そんな言葉を二人の老女たちと、お母さんは取代はしてゐました。わたしは「おや」と思ひました。「さあ大變だ」とも思ひました。わたしは山東京山や、戀川春町のくさ草紙から敎へてもらつた智識で、花屋敷の茶店に腰かけてゐる男の前を、娘をつれた連中が通りかゝると、伴のもの同志とか、こちらの連れと先方の父親が知己だとか何とか都合よくこしらへてあつて、兩方が落會ふように仕組んであるのを思ひだしました。それでは、今日は何もかもお母さんは知つてゐて、そしてあんな白々しい挨拶をして見たり、何氣ないふうをして私を連れてきたりしたのかと、氣がつくと親子のくせに妙なことをしたものだとへだてられたような嫌な心持ちがしました。それにしても、何にも知らなかつたのは私一人か、それとも妙な咳拂ひばかりしてゐるあの男も知らないのか、知らないのなら御同樣に、傀儡子につかはれてゐる人形のように氣の毒でもあるし、知つてゐるとすれば、私一人がまるで下見でもされるようなもの、知つてゐたなら今迄かうやつて凝としてゐた時間が、耻かしくつて、どんなにか長い切ない時間であつたかもしれない、けれど知つてゐてならば、まるで品物のように、眺められたり心の中で品評された

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りするのを、ぼんやりと的になつてゐはしなかつたらうにと、だまされたといふような腹立しさがこみあげてきて、私の胸はお茶一口入れることも出來ないように、切なさが一ぱいになつて涙までがこみあげてくるので、もう一時も座にいられなくなつて、

「さ歸りませう、歸りませう」と急立てました。

それを氣がついた耻かしさから、座にゐたたまらなくなつたのとでも思つたのでせう。主婦が、

「お若いからねえ」と云ふようなことをいふと、お母さんまでがをかしくもないのに聲を合せて笑ひました。

外へ出ると、もう暗くなつてゐたのでわたしは車の上で、拭いても拭ききれないほどにぼろぼろ涙をこぼしてゐました。それでもお母さんの仕方をなるたけ好い方にとつて、私にしらせておいてくれなかつたのは、先方が嫌だといつたときに私にきかせるのが可哀さうだとでも思つたのか、私が不承知なときに斷りよいようにと、さう取りはからつたのかも知れない。泣くことはありはしない。家へ歸つたらすぐに、もうお嫁にやられるのならわたしは嫌ですといつてしまはう、直でないといけないと氣をとり直しながらも、お母さんの心持ちが知れかねて心を痛めてゐました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わたしは聖人ぶるのでも、天乙女のように清淨がるのでも、小町のように思ひあがつてゐるのでもありませんが、老人達が生てゐる時分、その人達の秘藏つ子であつたわたしは、婿をとらせるのだとか、別家をさせるのだとか口癖のように云つてゐました。弟もありますし老人のいつてゐたことを其通りになるのだとは思つてもゐませんでしたが、それでも此家へなりは嫁くかとか、嫌なら嫌といつたがよいといふこと位は聞いてもらへて、嫁られるものと思つてゐました。今夜は屹度兩親の前で返事をしなくつてはなるまい、そのときに何時ものように胸がせまつて、涙がさきへ出てしまうと、つい曖昧な返事になつてしまう、それを思ひちがへなさると取返しがつかなくなる、强かりしなくつてはいけない、强かりしてゐなくつてはいけないと、滅入りこみたがる氣をひきたてて、私はばちんの金具をはがしかけたのをやめて、大祖母さんに守つてゐてもらはうと、お燈明を搔立てて、お佛壇の中へ顏を突きこむようにしておがみました。

歸るとすぐにお母さんはお父さんと秘々おはなしをなさつて、それから私のそばへお出で、わたしが御佛壇から顏を出すまで無言つて待つてゐてから、

「お前も十九だから、おほかた今日の樣子はおわかりだつたらう。お父さんも大變氣がむいてお出だし先刻もあの場で先方のお母さんが、せひにとお云ひだから、今もお父さんと

相談をして、私達はやることにきめましたよ。お前にしても身のきまることだから嫁とはお云ひなさるまい、兩親が望んでゐるとほりに取極めてもよからうね。」

と、きつぱり、それこそきつぱりと壓かぶせるように言渡されてしまひました。十九年の間、強いお母さんだと思つたこともありました。ある時はわたしだけ繼つ子なのかしらと、よくないことを思つたこともありましたが、嚴敷つても何處かやさしみのある懷しいのが、母親だと思つてゐましたのに、取りつく島もない、あんまりはつきりした口上なので、わたしは今迄に覺えのない峻嚴といふ味をお母さんに見出しました。

もうすこしほかに云ひようがあつたら、わたしはお母さんの膝に縋りついて、この次にはどんなところへでも嫁きますから、どうか今日の見逢ひの人だけへは許しておいて下さい、私は自分が怖いように自分の直覺を信じてゐますから、とても今日の人と見逢ひをしたとは思つてをりません、わたしとあの人とは、どうしても他人ですと、我儘かも知れませんか、どうしても打消けることのできない、私といふものをわたしは知つてゐますから、さういつてお母さんに謝たに違ひありませんが、さうはさせてもくださらないし、とても私の返事なんぞ聞いて下さりさうもなく、低徊れてゐる私の頭の上から、

「好いだらうね」と念をおして立つておしまひなさいました。

私の長閑な、樂しかつた娘心の華やかな日は、其日の外出まへで終りになつてしまひました。手箱に入れた緋鹿の子は、其まゝに見かへられもしなくなりました。半襟にかけた紫鹿の子は、涙がかゝつて伸たところが出來る運命でした。

一日二日、私は堪へにこらへて何氣なくはしてゐましたが、あんまりの愁(つら)さに三日目の夕暮、小夜着をだして引被つて泣いて寢てから、ぶら〳〵と寢ついてしまひました。

一月あまりで進められて髮をとりあげさせると、やつぱり魔の日でした。髮結ひさんのいつたことが氣になつて、おつちやちやんにそつときくと、

「御結納がくるのですつてさ」氣にもかけてゐない樣子でさう云ひました。

「おしゆんのは我儘病だ、亭主をもたせれば嫌でも癒つてしまう」とお父さんは云つてゐたさうで、お母さんは、

「あの子はあんまり物を苦にしすぎるので困ります。けれどあんな賑やかな派手な家庭へいつたら、氣が引立つて乾度人が違つたようなおかみさんになるでせう。何の病氣つてありやあしません、年頃の娘をあゝしておくと、妙な氣質になるものです」と云つてゐたとも聞かせました。

（未完）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うづ（承前）

荒木滋子

前の日は來た。押し迫つた心持ちが皆を壓して居る。母親は充溢した誇りと喜びと安心とに、平静の中心を失つて居るやうに見えた。幾度も往來する仲人や、先方の親戚の人への接待にも平素の母親に似合はずドギマギした。坐敷に坐つて少し落着いて話でも爲て居れば可いのにと思ひ乍ら芳子が、臺處を手傳つて居る時にでも、客人を置きつ放しにして立つて來て、お銚子の出しやうが少し遲れたと云つて叱つたり、果物の出しようが惡かつたと云つては叱つた。

『此方の方は安心なすつて、お母さんは彼方へ行つて被居いませ』

『あゝ、だけども、そよが餘りぶまだから眞にお客樣に赤面する』斯う云つて手傳うのでもなく坐るのでもなく、迂路々々と當り場のない小言を續け乍ら、用もない小鉢を只右から左へ置き替へたり、鐵瓶の湯を振つて見たりして、又忙しさうに廊下を身づくらひし乍ら坐敷の方へ引返して行く。

『米子、早く着物をお着替へなさい、御挨拶に出るんだから』又、立つて來た母親は米子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を促した。米子は立溢つてゐた。

『姉さんまたお坐敷へ行くの？』と芳子の方へ意を含めた眼を向けた。

『お母さん、××さんが何か有仰つたんですか』

『いゝえ、何とも有仰らないけれど…………』

『ぢや可いぢや有りませんか今日は、あつちこつちお暇乞だの御挨拶だので米子も何だか落着かないやうですから今日はまあ、誰にも御目に懸らないで濟むように爲てお遣りなすつた方が可くは有りますまいか』

『…………』母親は不平相だつた。

『お母さんは私を見世物にでも爲た氣で被居るのかしら…………』と、後で米子も戯談さうに云つた。

夜になつた。姉は、明日他家の人と成る妹に敎ふ可き事を、只遺憾のないやうにと愛へた。朝の身じまひ、姑への挨拶、三日間に替へる着物、そんな事に迄細かい注意を與へなければならなかつた。

『あつちへ行つたら、あつちの妹さんの事を何て呼ぶのでせう、姉さんつて云ひませうか』と自分よりは二つ年上と聞いて、其呼び方にさへ迷ふおつとりとした此の妹を、せめて暫

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

く女中の一人も附けて遣られるならと、芳子はもう身も世もなく案じられて來た。

夏物、冬物、撰り分けて簞笥へ了い乍ら、『能く覺えておいでよ、すぐに着替へる着物は二番目にね』と、教へても氣ばかり昂奮してゐる米子は、すぐ忘れて行つた。自分で藏つた髮飾りさへ、入れ處を忘れて、鏡臺や用簞笥の抽出を幾度も明けたり閉めたりした。『鍵と紙入の在り處を忘れては大變よ』と態と華やかに語る芳子の胸には、刻々に重いものが押し寄せて來る。仲人の細君――それは決して、氣の利いた、新嫁の介添として遺憾ない取り計ひをする人には見えなかつた。純朴な、未だ都會馴れぬ、好老婦とでも云ひたい人である。母親は米子を膝元に呼んで、靜かに訓す事の出來る人ではない。人出入りの多い客商買はしてゐても、米子は決して人摺れた子ではなかつた。今迄の米子の頭腦に男とか、女とか、結婚とか云ふ事がどれ位の智識で這入り込んでゐるだらう、それが芳子には分らなかつた。さうした事に聊かの暗示も與へなくとも可ささうにも思へるし、そんな事の暗示を與へると云ふ事は却つて餘計な事のやうにも思へる。けれども未だそんな事に立入つた智識を少しも持つて居らぬとすれば、若しや、若しや、米子の其夜の驚愕は何れ程深いものであらう、常から偏頗に感情の高低する妹の胸に、この不用意な驚愕がどれ程に烈しく波打つて、奈何に探す可き心狀態に成らうも知れぬ、と想ふと杞憂と知りつゝ芳

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

子の胸は平かでなかつた。――何等かを語る可きか、要せざるか、如何にして語る可きか
――米子の心は刻々に重く成つて行く。
『米さん、昨日伯母さんの處へ上つた時に、伯母さんは何か仰有つて?』
『えヽ、着物の着かたなんか敎へて下すつたのよ、御挨拶の仕方なんかも、而して後は姉さんにいろ〳〵訊いて行くのだつて仰有つたわ、此話がせめて一と月も前に分つてゐるなら伯母さんの處へでも來て居て、種々覺えねばならぬ事があつたらうにつて有仰つたの』
『それつきり?』
『え、而して餘り私が御飯を食べ乍ら喋つたものだから、御飯を食べてからお話しつて叱られちやつたの』と云つて笑つた米子の顏は仇氣なかつた。芳子は、この子供らしい妹を掻き抱き度いやうに思つた。
――もう少し家に置いてやりたい!もう少し!――
未だ漲るやうな堰き切つた青春の迸りは米子の肉體に眺められはせぬ、と思うと一層に切ない感じが芳子の全身を衝いて環る。
母親達は、米子と芳子二人を殘して床に這入つたらしい。家の中は淋しく靜かだつた。
『米子、明日疲れるからもう休んだ方が可い、後は姉さんが明朝迄に整然として置いて上

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

げるから、お休み、而して緩りとお眠り』

『え、だけど私眠くないの、姉さんと一緒に夜通ししようかしら？』

二人はどちらも休む氣にも眠られさうにもなかつた。

激しく動搖して居る人々の間を縫つて、無頓着に分を守つて働いてゐる言葉のぞんざいな朴訥な爺やは、

『ねえ、お孃さん、今度は貴女の番――だつて云つちや、後前になるが、お孃さんも恁うして居たつて詰らないや、ほんとに今度はお孃さんの番だつて云ふ日が來りや可いね』と芳子の部屋の緣先へ來て、ズルける洋袴を――爺やは何時もお下り物の洋服を着て居た――引き上げて一服し乍ら、恁う云つたりして居たが、今朝は早くから默々として働いてばかり居る。

髮結を返すと、芳子は米子を連れてお湯に行つた。昨夜から米子を成る可く煩はさずに落着けやう、落ち着けようとし乍ら、却つて自分の心が何かに壓し詰められるやうに切なく成つて行つた。

お湯から歸つて來ると、今日の宴席に連る筈の東京に居る僅かな親戚達が集つて居た。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

長い時間を費して米子の仕度は出來た。一時迄に米子と鐵也と母親だけは、先に式場へ行かねばならないので、皆は米子と一緒に食べようとお晝のお膳を据えて待つて居た。一人食卓をズッと離れて、別物らしく本膳に坐らせられて居る米子を芳子は見るに堪えなかつた。

『米さんも皆と一緒のお膳に就いたら、今から儀式なんか仕なくとも可からうよ』さう云つて鐵也達の側へお膳を寄せて了つた。米子の顏には、皆の思ひがけない乾燥ぎ切つた昂奮の色が溢れて居る。重い感傷的な氣分は却つて芳子を領して箸も取る氣にならなかつたのに、米子は、

『お腹が空くと可けないから、澤山食べて行く』と聲に出して笑ひ乍ら、喋り乍ら、平常よりも餘計に食を採つた。暗く憂鬱で因循であつた米子が、恁うした場合に、かう迄華やいでゐるのを、皆は默つて見て居た。母親は『お轉婆嫁さん！』と云つた。芳子は慘々しいやうにも、苦々しいやうにも、云ひやうのない心持ちで、只感心して居た。

手を引いて車の幌の中へ腰を懸けさせて了ふと、芳子は突き上げて來る涙を呑み込み兼ねて、よろ／＼とする足許を入口の駒寄にさゝへた。ポーッとした眼先に、二三臺の俥を取り圍む見物の人群りが黒く寫つた。

殘りの仕事を果す迄、暫くの醉ひを買ひたさに、臺處で冷いコップの酒に口を當てゝ居ると、亡父の妹で東京に居るタッタ一人の父方の親戚である伯母が呼びに來た。仔細ありさうにズン〳〵先に立つて芳子の部屋へ這入て行く。

『何で御座いますの？』

『貴女なア、今日お祝ひに行かん事アあるな』

『…………………』

『何故行かんかい？』

『私少し、此頃、いつもの腦が惡くなつて居るものですから、若し又卒倒れでもすると、可けないと思つて、もう初めから、私だけは出ないと云ふ事に皆が承知して居るのです』

略式、略式と云つても相當に飾つた儀式を爲る事に成つた席へ出る爲めに、新調したり、縫ひ直したりして皆な紋服を仕度した。けれども、今の芳子は紋服どころでなかつた。とあすれば必要な小遣にさへ不自由勝であつた。親の膝許に居て、さうした内輪の經濟は他人には云へなかつた。

『爾麼こつ無からう、衣裳の事たらうたい、どうせ、母樣な、貴女にや面倒見てやらつさらんと思つたもんだけん、私の着替へは一張持つて來たばい』と持つて來た包を取り寄せ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て芳子の前に置いた。
『どうも有難う御座いました。けれど、料理屋の方は人數がちやんと定つて居ますから、今に成つて一人增えるなんて云ふ事は大變面倒なんですから、お願です、今日は此儘置いて下さい。其代り三日の日には屹度私も出ますから』
伯母は、凝乎と涙の眼を芳子の顏に据えてしみ〴〵と、
『ほんになア』と云つた。
『ホヽヽまあ伯母さん、米子も片附きました、御安心なすつて下さい。濟んでから、夜、久々で御一緒にお酒でも飮みませう』と取つて附けたやうに笑つた。其聲が自分の耳に淋しく響いて、何となしに自分を憫む涙を誘つた。

ドヤ〳〵と皆は出て行つた。手傳ひに來たお崎婆さんは、『サア、これからお芳ちやんの骨休めだ』と云つて盃を芳子に差した。芳子は朦朧して盃を受けて居ると、此頃は餘り飮まないからと云つて、昔の猩々藝者の面影もなくお酒に弱くなつたお崎婆さんは、もうお踊りのやうな裊娜々々した手振りを見せて居た。『愚痴の出ぬ内に切り上げ度いと思つても、お婆さんは性根を据えて呑んでゐた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『ねえ、お芳ちやん今度は貴女が嫁かなくつちや可けない、私がそれを骨折らなくつちやお父様に濟まないからねえ、此處でお芳ちやんも分別して、何うかもう少し仕合せに成つて下さい』

『私はお崎さん達が考へるやうな不仕合せではないのよ、人の心つて云うものは表から見ただけぢや分らないもの…………』と云ひ懸けたが、どうせ話して分る事でも無いにと、止めた。

『お母さんも心配して被居るし…………』

『お母さんの心配なんか何處を心配して下さるんだか』

『さう云つちや可けない、お母さんだつて、お芳が早く片附いて呉れゝばつて…………』

『もう澤山!』不興な忌々しい氣分にお崎の話を遮つたが、其時、自分でも分らない、それは別な意外の涙が頰に流れたので、芳子は袖で顏を蔽ふて了つた。

『お芳ちやん泣かないで下さい、惡く思はないで、貴女のお氣を惡くするとつて云ふんぢやないんだから…………』

芳子の涙が自分の言葉からと合點したお崎は、自分も亦手傳つて來る涙を、齒のない落ち窪んだ口許のあたり迄這はせて、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『お芳ちやん！』と鋭いヒステリカルな聲を上げた。

『貴女は私を信用して下さらない！私はお父樣の味方なんですか？お母さんの味方なんですか？それを貴女、お芳ちやん分つて居ませんか』つと、いざり寄つて芳子の手を執つた。

芳子は柱に脊を凭せた儘で居た。

『ねえ、お父樣の味方でせう、そんならお父樣の可愛がつて被居たお總領の貴女の事を心配しても可いでせう、心配しなければお父樣のお位牌に私が濟まない』醉の爲めに一層鋭くされた感傷を年寄つたお崎は、だらしなく涙に浸して啜り泣いた。男勝りで藝のみを賣つた俠妓の當年の面影を偲び乍ら、漸く宥めて横に成らせて、ほつとした芳子は、自分の部屋に戻るなり、耐えた、耐えた、云ひやうもない、いろんな涙に聲を上げてひいひい泣きに泣いた。

夜から朝へ

濱野雪

雨戸をすつかりしめて了ふと、生々しい木の香がプンとした。やつぱり暑い、明日の引越しは骨が折れよう。と思ひながら、お柳は出窓へ腰をかけて、暫くじつとしてゐた。今日建具屋がはめていつた棧ばかりの障子が、二枚重なつて高麗屋格子のやうな影を、雨戸へ落してゐる。振向いて見ると、この室の蚊帳と葭戸を透して、次ぎの間の電燈が水のやうに明るくとぼつてゐた。

お柳はふつと微笑した。そして立上ると帶を解いて、伊達卷一つになつて湯殿へ歩いて行つた。後ろむきに湯殿の開戸を閉ぢた時、明り取りの窓から、月光が左の肩を斜に流れこんだ。

頬から頸へかけてのひいやりとした、水白粉の香をなつかしみ乍ら、こゝろもち濃く口紅をさして、その指を小桶の水にいつまでもひたしてゐた。おしろいと紅とが溶けて、水面に小さな渦をいくつもゑがいた。白いのは白いまゝに、紅いのは紅いまゝに、別れ〳〵に細い絹糸のもつれたやうな渦を卷くのを、輕い興味をもつていつまでも眺めてゐた。し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

やがんだ爪先きが少しゝびれて、うつむけた耳朶が熱くなつたやうな氣がする。瞳を上げると、丹い唇と、白い頰と、櫛卷にした生へ際の少し亂れたのが、ひどく媚いて鏡裡にういて見えた。

お柳はうれしい氣がした。そのまゝ肌も入れずに、まだ仕上げの鉋の掛けてない、何處かざらつく板敷の上へしどけなく身を投げだしたまゝ、Sの事をじつと考へて見た。

そこはうす暗い雜誌社の二階であつた。三月はじめの暮れ方の鈍い日ざしが、火鉢をはさんだ二人の足許にちろ〳〵と落ちてゐた。灰色の壁には、口繪の原畫が有合せの額椽にはめこまれて、いくつも〳〵こればかりは鮮かな色彩を滲ませてゐた。側のテーブルに上せたコーヒー茶碗の細い湯氣と、對ひ合つた人の指先きに忘れたやうにつまゝれた煙草の烟と、一つになつてゆら〳〵と舞ひ上るのを、お柳はぼんやり眺めてゐる。その眸がその人のうつむけた面に落ちると、その每に胸が熱くなるやうな氣がした。そしては今讀まれてゐる自分の原稿を、そつと取戾したい程の羞恥を感じた。

ほんとうにお柳は意氣地なしであつた。また、ほんとうに作をする上には、泣いてやりたい程みじめな天分しか考へられてゐなかつたのである。そのからつぽな頭腦を絞つて、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一行二行と溢り勝ちな筆を進める時、一つの心は常に自惚れてゐた。も一つの心は常に赤面してゐた。それがもう書上げられて了つてからは、全てが赤面する心ばかりであつた。時としては、だまつてぼろ／＼涙をこぼす事もあつた。それ程に、自分ながら愛想のつきるくだらないものしか書けなんだのである。お柳はその物にどれほど苦しんだ事であらう。幾度か筆を捨てようとも思ひ定めて見たけれど、それには余り未練がありすぎた、全く筆に離れたあとの寂しさを思ふと、とてもとてもたまらなかつたのである。それでとうとう最後に、自分は自分の爲に作をしよう。よしやそれが、どれほどに哀れな貧しいものであらうとも、自分一人のものは自分一人で育みたい。いとしみたい。そして、遠い／＼未來に俟ちたい。――斯う決心して、お柳は悲しく微笑するのだつた。

斯うしたお柳にとつては、自分の作を自分の面前で讀まれる位、辛い苦しい事はなかつた。何かでぐい／＼壓迫されるやうな、とてもじつと落着いてはゐられぬ心持になつて忙しなくあちこちと眸を動かしてゐた。

「ヤ、結構です。どうも御面倒をかけましたねえ」

と、柔かな調子でさう言つて、Ｉと呼ぶその社の主筆が親しみ易い微笑を見せた。その調子と顔色に依つて、お柳はやつと落着く事が出來て、默つて笑みながら膝の上で指を組

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

合せた。作の中のある一節などがふと胸に繰返された。

Iは身を屈めて、消えた煙草に火をつけてゐる。コーヒーの湯氣はもう立たなかつた。

「――あなたは、あんまり苦しまずに、お書きになるんでせうね」と、微笑を續けたまゝさう言つた。お柳の唇にこんどは淋しい笑が浮いた。苦しんでゐると答へたかつたのである。けど、「えゝ」とだけ答へて、あきらめに似た心細さを味つてゐた。

と、その時、誰かトン〳〵を階段を上つて來た。はつとして顧みたお柳の眸と、ドアの蔭から覗いた面とが、ぴつたりと合つた。お柳は一時に全身の血が逆流したやうな心持になつて、頸えまで燃えるやうに熱くなつた。

ドアは直ぐに閉ぢられた。「失禮」といふ一言を殘して、跫音はとなりの編輯室に這入つて了つた。やがて爽かな笑聲が聞えて來たのを、袂の先をいぢりながらしみ〳〵ときいてゐた。

ほんの一瞬の間であつた。だのに、あんなにもはつきりと印象されたといふのは、思へば不思議な事であつた。あの灰色の暗い壁を脊景にして、かつきりと浮んだ美しい面――それはほんとうに美しいといふより、他には言ひようがないと思はれる面であつた。無造作に刈り込んだ額際と口髭がつや〳〵と濡れてゐた。輪廓の整つた、少し白すぎる位な

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

面に、唇がそれはきれいな色をしてゐた。斜めに見た鼻の形も、刻んだやうに美しかつた。

「ア、S君か――」

Iが獨言のやうに呟いたのをきいて、お柳ははつと再び面を染めた。あれがSさまだつたのかと、烈しく動悸の打つ胸をおさへて、昨日貰つた手紙の文句を思ひ出した。「――いつたい何時まで會はずにゐようと言ふんです」少し茶化したやうな、怨みがましいやうな、皮肉なその文句が、ちら／＼と眸の前で踊る。でも、でも、まだ會つちやいけない――。

お柳はあわてゝ歸り仕度をした。そして、遁げるやうに戸外へ出てほつと息をつくと、もう日はとつぷりと昏れてゐた。そのくらい中に、Sの眞赤な唇があり／＼と匂ふてゐた。

それからもう四月にもなる。けれど、まだ會はうとは言はなんだ。お互に妙な意地から言ひ出しそびれて了つて、お互の心の底を探るやうな手紙ばかり書きあつて、そしていら／＼しい日を送つてゐるのであつた。

だのに――それを思つたら、お柳は急に耳鳴りのする程面が火照つて來た。ふとした氣紛れな、浮わついた心にそゝられて、今日のやうな暑い日に、わざ／＼遠い溜池まで、S

の家を見に行つたのであつた。――

ひよつとしたら、Sも見られるかも知れないといふ、仄かな希望と歡喜とが、つよく心の底に動いてゐるのを、强ひておさへつけて氣のつかぬ面をして、眞日に乾いた日盛りの途を、蔭を拾ひ〳〵歩いて行つた。七月の高い空を、折々烟のやうな雲が走つた。

Sの家は待合の多い、細い横丁の中にあつた。板塀の上から楓の葉末が覗いてゐた。格子戸のそばに、夏水仙の白い小さな花が咲いてゐた。その前で、脊のすらりとしたひとが張物をしてゐる。はでな絞りに靑つぽい博多の半幅帶を貝の口にして、燒桐の庭下駄をはいてゐた。「あゝ奥さんだな」さう思つて、少し急ぎ足に通りすぎた。たいへん御縹緻のいゝ方だと聞いてゐたが、成程さうらしいと思ひながら、折目のしやんとした手拭を姉樣かぶりにしてゐる、ほつそりとした。頸足をふりかへつて見た。そして角を折れると、一寸立止つて思案した。

お柳は、このまゝ行過ぎようか。それとも一度立戻つてみようかと、暫く迷つてゐたのである。けれど、矢張り未練が元來た方へと足を返させて了つた。洋傘を深くかざして足許に眸を落して歩いたがその門邊まで來た時に、殆ど本能的に見上げると、先刻は誰も居なかつた二階の緣側の藤椅子の上に、Sが白地の浴衣を着て寢ころんでゐた。胸の上へ新聞

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

をひろげて、片膝をくの字なりに立てゝゐる。お柳はその少しまくれた素足と、やつぱり美しい横顔とを見てゐる中に、ふと逆上せてくるやうな氣がしたので、袂を頰にあてゝ唾をのみこんだ。でも、こんなに落着いてSを眺めることの出來るのが、不思議なやうな、うれしいやうな、妙な氣がした。で、洋傘を少しかしげて、わざとぐづ〳〵歩いてちら〳〵とを眺めてゐた。すると、張板を片寄せたひとが、と反身になつて、眉庇して、何か言ひながら優しく笑ふと、Sも體をのりだすやうにして、片手を手すりに掛けて同じやうに笑つた。それを見た拍子に、お柳は如何したのかびり〳〵と戰いた。そして急いで歩き出した。今ちらりと自分へ反れたSの眼差しが、何時までもうしろから追掛けてくるやうな心持がして、汗のじく〳〵湧くのがはつきり解つた。

Sはほんとうに私を見たのだらうか、と考へて見た。でも、よしや見たとした處で、私の面を知る筈は無いのだもの、ちつともかまひはしない。またさう思つて安心はしたものゝ何處やら擽つたい、きまりの悪い氣がしてならなんだ。お柳は眞赤な面をしてゐた。そして、何時ぞやSの描いたものゝ中に「洗ひ髪を櫛卷にした夏の女」があつたのに誘はれて、櫛卷にして紅ばかり薄く含んだ自分の姿を、少し腹立たしい思に眺めたりした。いつたい自分はどんな氣でゐるんだらうと考へながら、また日盛りの途をかへつてきた。

ほんとうに、自分はどんな氣でゐるんだらうと、今更らしく考へて見た。と、お柳は、何とも言へぬさびしい〳〵氣になつた。そして深い羞耻を感じた。「なんといふ不眞面目な戀」さう思ふと、たまらない程耻かしくなつたのである。

併し、それもほんの暫くの間であつた。ぢきにいつもの捨鉢に似た心が湧いて來て、如何だつて成るやうに成れると思ひ捨てた。一日一日を無理からでも華かに塗潰して、儚い夢にもせよ醉はれゝば、それで仕合せなんだからと、自分と自分の心に云譯して、それでもう安心した氣になつて、ふつと笑いたい氣にもなりながら、立上つて肌を入れた、かなり長い間板敷の上に横になつてゐたので、割に肉附きのいゝ胸まですつかり冷へ切つてた。湯殿を出しなにも一度鏡を見ると、先刻と同じに丹い唇が笑つてゐる。

「ほんとうに、Sさんのやうに美しい唇だ」斯う嬉しげに呟きながら、やつと寢間へ戻つて來た。次ぎの間の電燈はやつはり明るくともつてゐて、頁を繰るのらしいさら〳〵といふ音が、蚊帳の裡から聞えてゐた。

「あら、まだおよらないの」

さう言つて、後ろむきになつたまゝするりと寐衣を着替へた。そして覗くやうに透して

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

見た。

「えゝちつとも眠れないんですよ。だからねえ、今夜はよつぴて此本を讀んでようと思ふの」

その人の聲や調子には、何處か女性的なところがあつた。とりわけ女と語る時には、まるで女のやうな物言ひをするのが癖だつた。

「さうを」お柳は聲を立てずに笑つた。

「——今どこを讀んでらつしやるの」

「——幻影の盾なの」と、身じろぎするらしいけはひがした。

「クラ、ですか」

また笑つて、蚊帳へ這入りかけたが、ふと思出したやうに「少しあけて置きませうね」と言つて、葭戸を五寸程引きあけた。と、そこから若い男の匂ひが、むつと流れてくるやうな氣がした。じつと眸を凝らすと、弟はもう彼方向きになつてぐつすり寐込んでゐた。

Eは腹ん這ひになつて、煙草を吸ひながら頁を繰つてゐた。この人も色が白い——さう思つて、男の匂ひと煙草の匂でとが入交つた、うす甘い空氣にひたつてゐる中に、ふと輕い誘惑を感じてきた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お柳は急いで蚊帳へ飛込んだ。「ほんとうにおよらないと毒ですよ」と聲をかけて、ぎゆつと胸の上で兩手を組んだ。

奈何いふものか自分もちつとも眠れない。寐返りばかり打つてゐると、今まで忘れてゐた生木の匂ひがまた鼻につく。氣のせいでか疊からも青臭い匂ひが散るやうで、いら〳〵するほどなほ眼が冴え、神經の昂つてくるのがどき〳〵と、胸に上せた手掌に傳はつた。おしまひには、傍にすや〳〵と眠りこけてゐる妹が、なんだか憎らしくも思へて來た。

「Cちやん。Cちやん」と搖つて見たけれど、「う〻」と低く呻いたゞけで亦輕い鼾を立てる。黑びろうどのくゝり枕を半ば外して、ぐつたりと露はに投げ出した二の腕が、緩い曲線を描きながらちよい〳〵お柳の腕の下へ觸るのが、不思議な快感を與へるのだつた。「ほんとうに、今夜はよつぽどどうかしてるよ」とひとりで面を赤くした。そして、近頃めつきり女らしくなつた妹の、むつちりした乳の邊りや、滑つこさうな頸の邊をじつとじつと見詰めてゐたが、いきなり力いつぱいその肩を抱きしめると、火のやうなキスを頰に與へた。——

お柳は深い〳〵吐息をした。少し汗ばんでゐる妹の頰に、捺したやうに口紅のあとが附いたのを眺めて、でもまだ安らかな眠りを續けてるのに安心すると、くるりと脊を向けて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眼を閉ぢた。

まださら〳〵と頁を繰る音がしてゐた。

寐苦しさに、あがき續けた氣でゐたが、それでもうと〳〵したのらしい。ふと何かの物音に脅かされて、びくりとして目覺めると、まだ半分夢心地で枕を上げた。

その物音は續いてゐる。そしてそれが、誰か雨戸を明けようとして、掛金をこち〳〵やつてるのだと解つた時、お柳はつい微笑して了つた。夢の中でひどく自分を脅かした物音の正體が、あんまり呆氣なかつたのがお笑しかつたからである。で、直ぐに起きて緣側へ出て見ると、Eが細い軀を曲げて、頻りと具合の惡い掛金をいぢつてゐた。

「おはやう。もう起きたの」

さう言つて掛金へ手を遣ると、ついその手と手とが重なりて、若い男女の血のぬくみがお互の指から指へはつきりと通つた。お柳は思はず爪さきまで、ずしんとしびれたやうな心持になつた。Eもびくりとしたらしつた。けれど二人は直ぐ笑ひかけて手を引込めた。そして一寸間を置いて、お柳はまぶしげに眼を細めながら、雨戸を一枚だけ繰りあけた。

「いゝお天氣ねえ」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て隱しのやうに言つて、片足とんと音させて通つた時、白と濃藍との辨慶になつた伊達卷が、しどけなく裾へ流れてゐるのに氣がついた。それがしゆつしゆと爽かな音を立てて、胸へまきついて行くのを、Eは默つて眺めてゐたが。——暫くして、

「柳さん」

と、たゞ呼びかけた。そして二人は並んだまゝ、きれいな〳〵早朝の空を眺めた。

實際美しい空の色であつた。藍でなく、綠でもなく、一寸何と形容していゝか解らぬほど、淸みきつた透き通るやうな色であつた。湛へた水が重さうに見える程に、深い地や川ではいけない。といつて、底の眞砂が握れさうな淺い流でもない。影を落す木も草も、みんな若く瑞々しい中をゆく、せつかちな淸んだ小川にならば、或はこれに似た色を求め得るかも知れぬと思へた。

二人はそのまゝじつと立つてゐた。あとの二人はまだぐつすりと寢入つてゐた。それを思ふと、お柳はふつと擽つたい氣がした。

「——あれからずつと起きてらしたの」

斯う言ひながら、中二階の方へじやれるやうに轉げて行く、鉋屑の塊を見てゐた。

「えゝ。今朝までちつとも寢なかつたの」と笑つて、きものをきちんと直した。そして、

思ひついたやうに急に、「ぢやさよなら。どうもお邪魔さま」と言つてずん／＼裏口の方へ行きかける。お柳は少し殘り惜しい氣がしたので、「まあ御飯でも上つてらつしやいな」と言つたけれど、たゞ笑つたばかりだつた。

女きやうだいばかりの中に生れたせいか、ひどく氣弱な遠慮がちな人で、お柳の弟とは尋常科からの仲よしで、一緒に同じ中學まで出た位なのに、それでもお柳達の兩親などには、碌に口も利けない程だつた。物言ひぶりばかりでなく、字もまた女みたいに優しいきれいな字を書いた。お柳の知つてる限りではうちへ泊つたのも昨夜がはじめてだつた。

そんな事を考へたら、お柳はひとりでに微笑された。

「ぢやあほんとにさよなら」と、後ろから聲を掛けて、ほつそりした姿つきを眺めてゐた。――丁度その姿が、木戸の彼方へ消えるか消えない途端だつた。玄關のガラス戸をどん／＼叩いて、お柳を呼びたてる聲がした。それは家中で一番性急な母親が、ちつとも朝すゝの中に片附けようと、いつでも寢坊しがちなお柳をば起しに來たのだつた。すつかり普請の出來上るまではお柳達三人を用心の爲に寢泊りさせて、兩親だの小さい弟達なのは、まだ舊宅の方に住まつてゐたのである。

その癇高な聲を耳にした時、お柳は何故とも知らずひどくどつきりして、本能的に裏口

の方へ眼を走らせたけれど、そこにはもう何物の影も求められなんだ。と、ほつとした心持になつて、直ぐ母親を迎へ入れて、たゞにつこりして見せた。母親は、よく早起きをしたと言ひたさうな上機嫌で、せか〳〵とそこいらを歩き廻つてゐる。自分もそのあとにくつついて歩いてたが、ふとその木戸が風にあふられてゐるのに氣がついたので、急いで知れぬやうに錠を下しに行つた。そして、まだ何にも氣附かずに歩き廻つてる母親を眺めてゐると、急にお柳のこゝろのなかに、とんでもないお芝居染みた空想が浮かんで來て、もうもう可笑しくて可笑しくてたまらなくなつた。どう我慢してみても、笑がお腹の底からこみあげて來て、おさへる事が出來なんだ。お柳は涙をこぼしながら、轉げるやうにして笑ひつゞけた。

…………………まるで人知れず隱れ逢ふた忍び男を、きわどいところで逃がしてやつたやうなものだ…………………

ほんとうにきわどいところだつた。と、お柳はいつまでも〳〵笑ひ續けた。呆氣にとられてぼかんとしてる母親には「いゝえ、なんでもないの」と、首を振つて見せながら、でもまだ笑が止まらなんだ。おしまひには、せいせい息を切つて、睫毛を傳ふ涙を拭いて、がつかりした面をした。實際Eを戀人として考へる事が出來ようか、とも思つたりした。

自分より三つ年下のおとなしいひと。始終、弟を見る心持で眺めて來たひと。そのひとを戀の對象とする事は、とても出來さうにもなかつた。しかし、昨夜から今朝へかけての和かい感情のあとを辿ると、たしかにぼんやりと意識される程の愛感が底に動いてゐた。「とにかく、好きは好きなひとだ」と心に呟いて、先刻並んで空を見た時に、「柳さん」と自分を呼んだ事を思ひ出した。Eは、大抵の時は、「姉さん」と呼んだ。奈何かすると弟の呼ぶやうに、「柳ちやん」とも呼んだ。だのにさつきは「柳さん」と呼んだ。それがひどく親しげにきこえたのだつた。——

今お柳のあたまの中を、Sと、Eと、この二つの幻がくる〳〵と渦を卷いてゐる。お柳は蚊帳を半分疊みかけたまゝ、うつとりと考へに沈んでしまつた。忙しいのにと思ひながらも、やつぱり考へずにはゐられなんだ。

この頃の自分はSに對して、たとへそれが不純なものにもせよ、とにかくもうとても抑へきれぬ程の、强い烈しい戀を意識してゐるのである。だのにその最中にさへ、Eに對してもある戀ごゝちを感じたのである。——むろんそれはほんの氣紛れな、いたづら心が生んだ一時の夢みたいなものではあらうけれど——Sを戀ふる心でいつぱいに成つてる時に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

でも、他の男からの誘惑を感じる事が出來たのだつた。――それを思ふと、フヽンと言ひたい氣がして來た。

「浮氣もの」

斯うはきだすやうに言つて見たけれど、自分で自分を嘲るその皮肉の奥には、自分の感情をおもちやにするのを歡ぶ、不思議な興味が強く働いてゐた。少しでも醉へる夢の中に生きて行きたいのだものと、お柳はまた自己の或る心に云譯してみた。そして、昨夜からの感情の動き方を、Sへ書いて送らうと思ひついた。晝間の事はわざと隱して、たゞEの事ばかり書かうと考へた。

面白いおはなしをお聞かせ申しませうか――

お柳は先づかう書かうとした。そして、まだ疊み終へない蚊帳の環をおもちやにしながら、だん〳〵暑さのにじんでくる中庭の塀ぎわに、重ねたまゝ凭せかけた梧桐の根を卷いた、泥だらけの荒繩を眺めて、青い帶のすらりとした後ろつきと、美しく笑つたSの唇とをうつとり思ふてゐた。

玄關の邊りがざわめき出して、誰かゞお柳を呼びたてゝゐる――。

初戀のなりゆき

岡田八千代

五

私は夕方になつたのに驚いて、明日(あした)は次郎さんの方から尋ねて貰ふ事を約束しておいて急いで次郎さんの家を出ました。そして家へ飛び込むが早いか母の側へ走けつけました。

「まア遲いぢやないかどうしたの。」

と母は例の通りの冷やかさで言ひました。

「私ね母アさん次郎さんの處へ行つたの。」

「次郎さんて誰さ。」

「學校のお友達なの、それでねこれを貰つたの。」

私は懷中から次郎さんに貰つた繪端書を出して見せました。さだめし喜ぶだらうと思つたからでした。けれども母は一目見たゞけで、

「おやおや、大層しつこい繪ぢやないか。」

と云つたゞけで、又目許の仕立物の方へ氣を取られてしまひました。私はなんだか物足

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らぬ淋しい心持になりました。それですご〳〵座を立たうとすると、

「無暗に知らないお友達などの處へ女の子のくせにづか〳〵行くんぢやありませんよ。」

と釘をうたれてしまひました。私はせつかく明るかつた場所が急に暗くなつたやうな氣がしました。何もかもが厭なことのやうに思はれました。あれもこれも自分に無かつた方が好いと思ひました。私はそれでも繪端書は離さずに自分の机のある小さな二疊の室へ這入りました。そしてそこへ鞄を投げ出すのが早いか机の上につつぷしてしまひました。沸いて來るやうな温かい涙が、押へた袖と押へられた頰との間をむづがゆく流れはじめました。

「歌子、御飯ですよ。」

かう呼ばれるまで私は泣いてゐました。

「何をしてゐるんです、早く來ないとお汁がさめてしまふぢやないか。」

私は再びかう云はれた時に忙てたやうに立ち上りました。そして泣かない顔をしやうと思つて目をしばたゝいてそこらの何かを見やうとしました。が、その室にはまだ灯(あかり)もなく、たゞ葦戸を透して茶の間からさす灯(ひ)が斜めに私の着物ばかりを入れた古簞笥の黒い金具に反射してその上に飾つた人形の顔をぼんやりと照らしました。私はなんだか急に恐くなつ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たので急いでその室を出て茶の間へ行きました。茶の間には父は往診にでも行つたと見えて居ず、母が一人まじ〳〵とお膳の前に座つてゐました。

「何をしてるんだねえ。」

と私の顔を見ると母は直ぐに疳癪聲で云ひました。私は默つてうつむいて膳の前に座りました。

母は私の泣き顔には氣のつかぬ樣子でその事については何もいひませんでしたが御飯を食べてゐる中、次郎さんといふ子の家は何處だとか、どんな家だとか、どうして遊びに行つたのだとか、しつこく種々な事を聞きました。私はその爲めに御飯はろくに咽に通りませんでした。どうぞして母が次郎さんに惡い感じを持たぬやうに答え度いと思ふ心遣ひで。けれ共子供だつた上に一體口の重い私の事でしたからはか〴〵しい事は云へませんでした、それに母は次郎さんの家はいつぞやS町の醫者の來てゐた家だと私が正直に答えたので反つて心持を惡くしたやうにさへ見えました。

「そんな家へ内の者が出入りして、S町の醫者にとくいでも取るやうに思はれるのは嫌だからね、もう一切行つてはいけません。」

「でも向ふから來るのは好くて母アさん。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「おんなし事ぢやないか、なほいけないよ。」
「なぜ母アさん。」
「患者でもないのに遊びに來てもし又病氣がぶつ返しでもするとS町の△△に毒でも盛られたやうに思はれるのは嫌やだからね。」
　私はもうそのまゝ默つてしまひました。そして悲しい思ひを隱して御膳の前を立ちました。そして女中から洋燈(らんぷ)を貰つて又二疊へ這入りましたが、明日の下讀をするのを投げやつたまゝ、また烈しく忍び音に泣くのでした。情の强いくせに人懷こくて氣の弱かつた私は、母にかうした事を云はれたのが、もう一生誰とも友達になつてはならぬ程に押へつけられたやうな氣がして、もうもうもうもう悲しくて淋しくて堪らなかつたのでした。それにあした次郎さんの來ることを斷はらなければならぬといふ事も私にはつらい一つでした。その癖、母は直きに自分の云つたことを忘れてしまふ人だと云ふことは私も知つてはゐたのですけれど。

六

　私はさうした母の心を恐れてはゐましたけれど、夫にもかゝはらずその後の次郎さんと私との間はますます隔ての無い友達になつてゆきました。——友達といふよりも兄妹(きやうだい)——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兄妹と云ふよりも——さアなんと云つたら好いでせう、兄妹よりももつと深い、何か目に見えぬ糸かなんぞで、二人は生れぬ前から、その糸の端と端とに結がれた二人では無いかとさへ思はれました。そしてその糸はその當時二人の上に立つ神樣の爲めに最も近くたぐり寄せられてゐたのだらうと思ひます。けれども月日の經つに從がつてその糸はまただんだんに繰り延ばされてしまつて、大方今は切れてゝもしまつたのですかいくらたぐらうとしても引かうとしても私の手には何の手ごたへもないやうになつてしまひました。どうせかうなる位ならば、神樣もはじめから私達の糸を引いて下さらねば好いものをと恨めしくも悲しくもなります——あゝ思はず又愚痴になりました。これも病氣ゆゑとお許し下すつてまア後を聞いて下さいまし。

その頃から次郎さんは又學校へ出るやうになりました。しかし次郎さんはもう前のやうな「面の憎い」子では無くなつてしまひました、活潑なにこ〳〵した心持の優しい子に見えはじめました。それは決して私が次郎さんから美しい繪端書を貰つたゝめの妥協から來た考へでは決してなかつたらうと思ひます。實際病後の次郎さんは、まるで生れ變つたやうに元氣な晴々とした男の子になつてしまつたのでした。ですから私にばかりではなく、次

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

郎さんは前には仲間はづれにされてゐた男生からも次郎さん次郎さんと引張り凧のやうにされるやうになつたのです。

けれども次郎さんは、學校では兎に角として、授業がひけて歸る時には、以前のやうに兩方でしんねりむつつりと別々に道の兩側を歩いて時々そつと顏を見合ふやうな事は無くどつちかが遲い方を待ちうけて、そして、面白をかしく歌つたり話したりしては一處に歸るのが例になつてしまひました。けれども、やつぱし私には母が恐かつたので、家の側へ來ると私は次郎さんを走けぬけて一人で家へ走け込んでしまひました、そして玄關の小窓から次郎さんの淋しさうに歸つてゆくのを見るのでした。そして次郎さんの姿が見えなくなると大急ぎで復習をすましまして外へ遊びに出ます。外へ出た私の足は自然次郎さんの家の方へ行かずには濟みませんでした。けれども小心な私は母の叱言が恐いので、遂に誘はれても次郎さんのお室へは再び這入る事はしませんでした。次郎さんもそれを知つたので、今度は次郎さんの方から繪本とか繪端書とかを家から持ち出して私を外で待ちうけて呉れました。そして二人は一處に二三町隔たつたある野原へ行つてそこでそれを開けて見ては遊びました。こんな時から私の戀ははかない逢瀬をしなければならぬやうに定められてゐたといふのは何といふ不幸だらうと私はつくづく思ひます。夏は樹陰に春は日の中にさう

して二人が睦まじく遊ぶ中にも私は家へ歸る時を忘れるほど遊びにほゝける事は出來ませんでした。それほど私の母は私にきびしくそして冷たい人だつたのでした。

やがて春は來ました。私達の級がとある野原へつくし摘に出かけました。處がそんな遊びにやつきとなる事の出來ぬ私には、どうしてもつくしを見付け出さうといふほどの熱心が欠けてゐるので、つくしは一向に見當らず私は人々が手にあまるほど摘む中に、やつと二三本痩せた短かいのが摘めた位のものでした。その時にも次郎さんは私に優しく、自分の摘んだ澤山のつくしを半分あまりも呉れました。そしてその中の一番長い大きなのも惜しげもなく私に呉れてしまひました。

その頃から私と次郎さんとの間が人々の目につきはじめました。そして私と次郎さんとが一寸でも側へ寄ると人々は騷ぎました。私はその度びに母の事を考へて恐れましたが、次郎さんは平氣で私を女生から庇(かば)ひました。その上他の男生を立派に征服してゆきました。そんなにも次郎さんは強い立派な勇者になつてゆきました。

（未　完）

病床相思吟

原阿佐緒

うつり香もたえだえのわが夏衣わかれて三月はや着る日なし

初袷襟もさびしくかきあはす木犀(もくせい)の香の寒き雨の日

相見ずて何たのしかろ秋山に果の實みのれど兒はもたくれど

つつましくひとりねをするわが姿よすがらまもる黄なるダアリヤ

子等二人並らびて寐しを見る時にげにほほゑまる戀も老ゆらし

相見む日またなき如く相なげき相思ひつつ遠々(こをこを)に居ぬ

秋の風身にしむ頃を血の涸る丶病ひもすなれ別れてし間に

蒼ざめてたゆき腕に兒を抱き乳の足らはぬをなげく秋はも

物置きの壁を黄に染めわが心かなしみに染め夕日照り照る

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

こほろぎ鳴く丸木の柵の影おちし月明の庭芒みだれて

珍らかに水の音さへ耳とまるいかに靜かにかなしめる身ぞ

たそがれの狹霧こめたる山の根にげにただひとつ黄なる灯の見ゆ

晝も吊る蚊帳の寂しさわが病める床にしばしば兒の寐ねに來し

戀もなく悲しみもなくうつろなす身を横たへて秋風をきく

乳貰らひに兒の出でゆけばくづをれてわが泣く癖も病みそめしより

例(いつ)になく兒はむづからず母ならぬ人の乳房を吸ふもいとほし

うらめしき人もあるなる病める身を吾となだめてあるあぢきなさ

蒼ざめし女の顔を思はせて君が前にも秋ぞゆかまし

豆の畑青ひろびろと月照れば湯槽にありてこほろぎをきく

一ひらの紅き花をば嚙み碎く戀を味ふごときここちに

東京の戀ひしくなりし心をばうちいでかねつなげく雨の日

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新妻として

遠藤琴子

くちをしくわが病めるをば背の君は熱の口さへ吸ひ給ひける
はね起きて君を抱きて泣かまほし冷き飯を君ひとりかむ
ただひとり家に殘りて病みながら君を思へば秋風の吹く
はるばるとわざはひばかり持て來る女なりけり君が戀人
早すでに君に與ふるものなくて亡びゆくべき日にはあらぬか
わが病むかいないな君を虐げて苦役におくにけだしあらぬか
厨よりもの煑るにほひ通ひ來ぬああ脊の君を煑る心地する
秋の空いと美しく晴れにけり小鳥のごとく君を放たん
すこやかにまろびゆくべき白玉の石につかへてをしき君かな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

今宵よし出でましものとかこつ君あまりあはれにうらめしきかな

八方に君あるごとく捨てられて野にあるごとく病めば狂ほし

花一つ咲かぬ庭をば眺めつつ病めばわびしき妻と思ひぬ

われ神に君にそむくと思はぬに早くも何のこらしめを受く

何しかもかなしきことを思へるぞ病みても君に抱かるゝ身の

甘えたる心ならねど君見れば病めることなど時に忘るる

父母にそむきてひとりはるばると病みに來つるにあらなくにわれ

キスをして君が出づれば起きがたき身のはらはらと涙流るる

君ゆくをねて送るさへかなしきにつと眼をやれば襖閉さる

君ゆけば忽ち涙あふれ來ぬわびしきすきを身につくりけん

ああ今か君が電車に乗るならんかすかにひびく音のなつかし

ひとりねて待てば見るものことごとく淋しきことをささやくごとし

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

秋思

三ケ島葭

秋の夜はものおもふこそわりなけれ玉のごと鳴く蟲もきこえず

明るさをいみじくいとふ君のためおのれ盲となりて世を經ん

なやみをばかさぬるごとき心地してまた束の間のよろこびに生く

悔ゆることやうやく稀に恨むこといよいよ多くなりにけるかな

打ちがたきものと一たび悟りたるこのみづからを止まず打つべき

恨まじとすればわが身に力わゞ尊き日なりひとり草刈る

もの足らぬ心にありて思ふことあまたつもれる心地のみする

かにかくにおのれを強し尊しと思ふに心え堪へうべきか

かねてより願ひしことにあらねども身をそこなひて世にぞ觸れける

われいまだ道の半ばと思ふとき思ふことみなはかなくなりぬ

みづからを呪ふにあらずただ人を恨む身となり悲しかりけり

思ひなやみなやみ疲れて一切をなげうたばやと思ひつるかな

たちまちに岩ほどばしる水の音わが心より起ると言はん

かなしきはたまゆらとしてゆるさるる命のほかにいのち無きこと

夕ぐれの窓にかざせばわが手さへ我を覗ける顔のごとかり

しらつゆの玉ちる木かげ風吹けば落葉することそわびしかりけれ

言ひがたきものなつかしさ身にわきぬ野分めきたる風の起れば

樽御輿かつぎて子等のさわぎゆく街を歩めば山のしのばゆ

さらさらと木の葉散るなり風吹けば空もさやかに晴れわたりつつ

子のためにただ子のためにある母と知らば子もまた寂しかるらん

われさわが身のかなしまれ蟲の音も聴くにえたへずなりにけるかな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜詠草

畔蒜こと子

をみなへしすべなく秋の夜の底に泣けるわが頬にさやかにそよぐ

青春のゆくべき秋かくるほしうあふげば夕日大きくしづむ

鈴虫の眞晝をなくはうらさびしさびしさ更にけすよしもなし

をみなへし風もあらぬにゆれゐたり寄邊なき身にしみわたりつつ

おしろいの瓶もさびしくいつしかや埃にまみれわすられにけり

氣むづかしき舅まであはれその嫁のつつがなかれと祈りますてふ

姑よりの消息もまたあらたなる涙をさそふ秋いやふかみ

うねりさく野萩白萩うちもだし踏めばもろくもはらはらにちる

蔦の葉に夕風ながるめづらしく思ひあかるう丘にたつかな

九月盡われいたましう産褥にうつら眠れば虫ほそくなく

われに似て悲しくあはれいたいけの兒をいだきつつ眠る秋の夜

乳の張りに夜半をめざめてあやしくも虫の響きに心さえゐる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

乳をふくむ子の頬の色の匂やかさかろくゆすぶりわれも眼とづる
つつがなく子を生みおとし蒼白き頬を鏡にうつしてもみる
ふぢきなき子と添ひ臥の幾夜へて身のすこやかに秋深みけり
やうやうに身もととのひぬ起きあがり髪のしづれを梳く秋の朝
中將湯うすらにがきもうらかなし子のすやすやと寢入れるあした
わが若さ子にいたづらに吸はれゆく心地に悲し秋もふけゆく

吉原芳子

秋の水月夜の野邊をひそやかに思ひにしづみゆくうれひはも
うすぐらきなげかひごとの片隅に小さく咲けるあやかしの花
あな悲し君にまゐらす白菊をつめばこぼるる露のつめたさ
このゆふべうすらなさけも身に沁みてわが指先をなつかしみみる
針とれば先づ大空を見あぐるも佗しき日日のならはせにして
かなしみをつげの小櫛にかきあげてほろほろおつる黒髪をみる
いふは憂しいはぬは苦し砂濱に書けばあだ波うちけしにけり
君がため君みぬひまにうすれゆくわがくろ髪はいとほしきかな

永井芳子

心つよくわかれしものを今はただこゝろの限りに呼ばまほしけれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

こひしさになやめるものの胸に似む今日このごろの空のかなしき

ほんのりとコスモス咲けばはるばるも清らけき人の思はるるかな

紺青に空晴れわたりしみじみと何か告げたきおもひなりけり

靈　千代

ひそまれる面會室の秋ひかげひとを待つ身のやすけくもなし

鹿の顏追へども逃げぬ鹿の顏この旅びことにさびしかりけり

嫩くさの山むらさきに暮れてゆくしじまのなかに君とわかれき

大根田小夜

ゆるやかに袖を微風にはらませて青葉のもとに歌ひつづけぬ

わがゆかむ一路さびしく絕え絕えに見えてかなしき篝火のかげ

さびしさに一人出て來し逍遙の歩ごとに君のこひしかりけり

木暮さゆめ

片こひとあらはに知れてさみしくもかへる夜空に秋をおぼえぬ

久保野清子

秋の日のふとり手さびし土のなかに埋もれはてんその手さびしも

鞆　音

雨ふれば師匠の家の御神燈けぶるがごとく灯影くらかり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

住吉哀歌

あかしあの身をふるはして病葉をおとすこころもかなしかりけり

木下桂子

ほのぼのと我世は明けぬ太陽のめぐみ親しみふたりあるかな

盡すべき限りをつくすこころだになほわが君にげせぬなりけり

日枝みどり

をちこちの街のさびしき群集のその中にわれもひとりなりけれ

老いまして遠きえにしのわが宿を訪はれぬ夢のごとく淋しき

おもひつめ何時まであるや柘榴葉の光もかげもしづこころなし

日にひかり風になびける柘榴葉のまぢかき窓に一人なげくも

柘榴の葉その實はぢけし柘榴の葉しづかに窓にひかりゐにけり

こひしさに心もえたちうつつなく深夜(しんや)の土をふみにいでつも

ある時は居もゐたまらでごつそりと晝の日なかに緋芥子手折りぬ

ゆふかげに虫さへ鳴ける萩がもと別れかねたるふたりゐるみゆ

わがくらき心にほのと咲きいでし花のやうなる人にこそあれ

あな惜きひとにあるかなさりげなくひと言云ひてはや去(い)にたまふ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戀愛の自由と本能

——鈴木某氏に答ふ——

山田わか

社會は複雜です。何億萬の人間が皆異つた事情のもとに生れ、異つた狀態のうちに養育され、異つた性格の人となり、そして思ひ〳〵の考を有つて動いて居ます。此の千差萬別な人の行爲を僅か六七頁で論じて見やうとするのは既でに烏滸がましい事です。けれども、大きな複雜な世界に恐れを抱いて唯呆然として居たのでは、きりがありませんから私達は先づ自分の考へる範圍を出來るだけ自分の力に相當する區域に狹めて、そして考へて見ます。そして考へ得たゞけを發表して見ます。發表はするもの丶、名もなき淺薄な一婦人の書いたものを眞面目に讀んで下さる方はあるやなしや誠に疑はしいと思つて居ました。處が計らずも此度鈴木某氏から一應道理ある御非難を得て、もう一度考へる事が出來たのを同氏に感謝致します。

讀んで下さる方に分りい丶やうに此處に同氏の御書面を揭げ、合せて其れに對する御答へを書く事に致します。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『謹曰　青鞜第四週年紀念號に於て、墮胎に就て、ちよう貴女の説を拜見いたしました。私は次に説はんとする事を除いて貴說に贊意を表するものであります。「父たり母たる資格を有する迄で抑制云々」と貴女は說かれましたが元來夫婦關係の生ずる根據は戀愛にあるので其の戀愛が自由であり且つ本能の交歡を伴ふものであるならば抑制云々の意義が何所に存立いたしませうか。墮胎とか避妊とかいふものが不自然であるならば既に本能抑制そのものさへも不自然ではありますまいか。人の精神は人の價値の高い所謂でせうが又本能が人の自然性である事は爭はれない事で御座いませう。今貴女の云はれた、下級の人々に就て考へて見るに、敎育の少ない、考へるべく多くの時間を有たない彼等の精神は最も下級な最も本能性に傾き易いものだと思へるでせう。又彼等の戀愛には確たる理想が御座いませうか。今そう云ふ者が共同生活に入つたと假定したら親たる資格なくとも直に本能に陷るでありませう。

貴女の云ふ所は畢竟「事實について論じ事實を忘れた論結を得た」のではありますまいか。

抑制そのものは戀愛の意義を破りは致しませんか、如何に。

敢て本能抑制をなくし、墮胎避妊を否認し而して悲慘なる者の生ずるは「進化」ちよ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

う自然的矛盾でもあり又國家社會機關の目的遂行の不完全なるを意味するもので現代としてかゝる悲慘の出生はやむなき事かと存じます。或はそれが社會進步の理由かも知れません。駄文を長々と草し甚だ失禮致しました。

此處に私は自由と云ふ事と本能と云ふ事に就て私の概念を云ふて見ます。人は戀愛の自由、生存の自由を有つて居ます。けれども其れは或る意味に於て、無條件に絕對のものではありません。我々は法律のもとにあつて始めて自由が得られると同じやうに、戀愛の自由も理智の制裁のもとにあつて始めて自由があるのです。法律と自由、理智の制裁と戀愛の自由、これは一見矛盾して居るやうに思へますがそうではありません。

動物界は其の本質に於て本能的で天然のまゝでそして其の程度で完全であるに反して、人間界は理性的で人工的でそして不完全であります。完全である動物界には進步がないのに反して、人間界の不完全なのは、其處に進步の餘地のあるしるしです。動物界と人間界の相違は理智の有無の相違です。絕對の自由をふりまわして居る動物界には進步はありません。自由も亦ありません。人間の理智はそうしては結局損であるから、さしあたり僅な自由を拂つて後に大きな自由を得よと敎へます。そして進步向上の喜びを得よと敎へます。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人間が野蠻狀態から今日迄發達して來たのは此の理智の敎へに、絕對の自由を要求する本能を從へたからです。（便宜上理智と本能を別なもの丶やうに云ふのですが、實は、そう、はつきりと區別の出來るものではりあません。唯比較的なものです。）人間の本能は固定した動物の本能（とは云へ、動物の今有つて居る居る本能でも、進化論者の說によると、永い間の反射的行爲の結果だそうですが）とは違つて、レファインされて行くものです。動物と大差ないものから、神性に近い迄進化して行くものです。

若い時、本能の命令に從つて行つた事が、後年になつてからは思ひ出すさへも冷汗を流すやうな場合が人には往々あるものですが、其れは其の人の本能が敎化されて行つた證據です。少しも進步して行かない人間はそう云ふ經驗を有たないでせう。

戀愛は自由です。けれども自由に生れた戀愛を生かして行くには其れを養い育て丶行くだけの用意がなければなりません。其の用意のない處に生れた戀愛は丁度石疊の隙間から芽を出した草木と同じて到底長生きをする力がありません。營養をとる事の出來ない新芽は早晚枯死しなければならない運命を有つて居ります。であるから戀愛が眞正な立派なものであればあるだけ、其れをきずつけてはならない、枯死させてはならないから、其の用意をする間、待つのは、本能に計り支配されて居る動物とは異つた理性ある人間のとるべ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

き道です。

私の云ふ『抑制』は云ひ替へれば『待て』と云ふ事なので、今一の幸福を得るために、不自然な手段に心を勞するよりも、待つて十の幸福を得よと云ふのです。貧弱な土地の上に枯死する幼芽を悲しんだりなぞする其のひまに土地を肥して、それから、幼芽を育て花を咲せ實を結ばしむる喜びを得よと云ふのです。

其れは一つの唯理想であつて、此の世智辛い現社會に生きて居つて、そんな悠長な氣持ちになぞなれるものかと云ふ人があるかも知れませんが、併しそう云ふ事を云つて居つて、何時此の現狀を改良する事が出來ますか。こう云ふ社會だから、こう云ふ不完全な社會機關だから止むを得ぬと降參してしまつて、自分の生命の一部である胎兒或は其の胎兒の可能性を殺す人があるとすれば、そう云ふ人は既でに〳〵意氣地のない敗北者です。今の若い人達がそう云ふ弱者であつては、誰が此の不完全な社會機關を改良するでせう。自分が天地に恥ぢざる戀愛の結果生む子供は何物を犧牲に供しても育てる。自分の生命を殺さなければならないやうな社會機關ならば叩き毀はそうと云ふ意氣が多くの若い人の心に起れば其所に始めて、內的にも外的にも、健全な進化が行はれるでせう。

抑制(則ち待つ)と云ふ事は戀愛の意義を破りは致しません。それは戀愛をます〳〵高尙

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なものに致します。今日生れて今日成熟する生命は小さな生命です。生れてから成熟する迄に年月がかゝればかゝる程其れは大きな健全な生命になります。待つ間に枯死するやうな愛なら、其れは本當の意味の愛ではなく、單なる肉慾です。と云つて肉慾を下等視するわけではありません。教養ある人の戀愛にも此の慾は伴ふに違いありません。『けれども、それは、太古に於ける穴居人が岩に彫りつけた彫物のかたちがミケルエンジエロの彫刻物のうちにも現れて居るのと同じ意味である』と現代に於て最も進歩した戀愛觀を有つて居る婦人は申しました。

肉慾が凡てゞある人達の結合は子が邪魔になりませう。けれども精神的の愛が本位の結合は其の愛の結晶である子を要求せずには居られない筈です。のみならず眞正な愛の結合は、自然の結果を避けるやうな手段には不快で堪へられない筈です。第一に其れは自分達を侮辱し神聖な戀愛を汚すものです。

墮胎避姙と本能抑制とを私は同じ性質の不自然なものだとは思ひません。墮胎避姙は將に芽ぐまれやうとする生命或は既に芽ぐまれた生命を破壊するのですが、時を得て居ない本能の要求を抑制する事は、後に健全な生命を造る基なのです。つまり前者は生命の破壊であるに反して後者は生命をたくわへる事になります。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

勿論例外はありますが先づ一般から云ふと、どうも男は戀愛を肉化したがり、女は其れを靈化したがる傾きがあるやうですが私は此處に女の大なる使命を認めるものでありまます。次の時代を其の胸に抱く責任を有つ女は比較的下等な男の慾を自分等の高尙なレベル迄引き上げねばならぬものだと思ひます。

下級の人達はレファインされて居ないイラショナルな本能に從つて居るから悲慘な生活をひきづッて居るのです。そこで彼等には敎育がない。考へるひまも有たないから、本能性に傾き易いのも無理はない。仕方がないと云ふてあらゆるものに超絕して居る貴重な生命の破壞を許す事が出來るでせうか。思想のある人達が彼等に對し、そう云ふ態度をとつて居たら何時彼等は其の悲慘な狀態から脫する事が出來るでせうか。隨分容易な業ではないには相違ありませんが、彼等の悲慘を救ふには彼等のイラショナルな本能をラショナルに導くより外に方法はないやうに思ひます。先夜米國のス博士の話に『私がシャイアムに居た時、其の地方に流行する劇烈な熱病を癒してやらうとして隨分種々な工夫もし、藥劑も用いて盡力したが思ふやうに效果が現れなかつた。併し今から考へて見ると私の考が足りなかつたのだ。此度私が其處へ行つたら、私は熱病に冐されて居る人々にかゝはるよりも先きに、其の病の根源である不純な飮用水をプューリファイする事につとめるつもりであ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る』と話されましたが實に其の通りです。が云ふは易くしてなか〳〵其れが一朝一夕に思ふやうになるものではありません。と云つて今の間には合はないから不正な事でも不自然な行爲でも肯定してい丶と云ふ事は不條理です。一ッの理想をたて丶、たとへ目に見ゆるやうな進歩はなくとも、着々其の方に進んで行かうとするのがラショナルビイングなる我々のとるべき道だと私は信じます。

私は何處迄も、むら氣な本能のために、又不完全な人間がつくつた不完全な社會機關のために、人間以上の力がつくつた、萬物の土基である貴重な生命が殺される事には不賛成を申ます。これが又自然の法則にかなつたラショナルな考へ方だと私は信じます。

三ヶ島葭子氏の論文『私の生活』

五明倭文子氏の小説『最初の家』

右二編は頁數の都合から組置次號廻しとなりました。

餘白で筆者に謝してをきます。

十月短歌抄

このごろのいちじろきこと何ならむ鏡をみれば顔はしらずも（萬朝報）　與謝野晶子

そびえたちしろき木曾山あふぐにもこの魂のまづしきすがた（潮音）　山田邦子

木曾川の水音にききてききいりてつひに涙のながれけるかな　同

八ヶ岳愈よけだかく落日にそびゆれば汽車は信濃にいりけり　同

赤帽子ふいとかぶりて南洋のはなのおどりをおどりてみたく　同

まめやかにさても巧にものをいふ吾子と泌泌ものいひしかも　同

青白きなれが肌へに日の光まともなればぞたへがたくみゆる　同

旅にして野の遠方にちろちろともゆる焚火はこひしきものを　四賀光子

くれかかる新治小野(にいはりをの)にともる灯の彌(いや)しじにして遙かなるかも　同

いつの日かまたかへりみむ新治の紫木が丘のゆふぐれのいろ　同

旅つきてかへるゆふべをしみじみと常陸墾原(はりはら)あめふりいでぬ　同

みくさおふる沼尻(ねじり)の水にふる雨を旅のかへりにみらく寂しも　同

汽車にして遠くはろけき道のみゆ雨にぬれゆく道みゆるなり　同

ささおつるつぶてさながら群鳥のいりてさわがぬかの雑木原　若山喜志子

松原のかたかげくらくなるままに茴香は黄ににほひこぼれし　同

ほそみきの赤松原に入日させど奥がはいよよくらくしづけく　同

誰にしもつぐべき事にあらざらむ四方の高嶺に雪ふればさて　同

うまれながらこひし海邊のここにきて猶古里は忘らへぬかも　同

松やまの彼のいただきに海みるときくよりもはや涙おぼゆる　同

わがこゆる青海のかなた故郷の秋かがやかに眼にせまりみゆ（詩歌）　小谷清子

天つ日の下のあを草さくさくとかられて秋はさみしかりけり　同

入海のなぎさに人をみいでたりわが舟をまつひとみいでたり　川端千枝

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

黒檜嶺にのぼるみちべの白樺のひと木ひと木に指ふれゆくも（水甕）　須藤みどり

廊下ゆくひとの足あと裾さばきほのかに秋のまつはるらしも　同

いくたびかわが心さへ裏ぎりぬ人のこころのなどたのまれむ　井淵はな子

なりもせぬ口笛ふきてこのごろの夕すごすとのたまひにけり　松平みさ子

秋風のさやさやとなる艇のもとにけふも便をまちたまふらむ　同

快くむすびあげたるけふの髪そとふれてみて君をしぞおもふ　同

一國の王となりたるこころもちわれなつかしきこの君をえて　新堀艶子

しみじみと命いとしくなりにけり今宵こひしきこの君をえて　同

うつろなる心の中にちさくしてはた強きものひとつありけり　阪元さち子

君がすむ北の國よりこしといふあかき林檎を掌にのせてみる　水町京子

旅にえし友なるためか淋しさのつきまとひたる人とおもひぬ　同

つきぐれのはな點點をちりしける厨のあさのはつあきのかぜ　同

ひかりやまず水は波うちなみうちてながれゆくなり秋風の中　長岡さみ子

人しれずかくれし罪を身一つになやみつくして秋となりけり　高橋棄子

汽車の窓緑の木木もあを潮もさびしかりけり子にはなれきて　小野幸子

秋たちぬ和歌の浦わの歌まくらめぐりてひとり君をおもはむ（潮音）　南ゆかり

しつとりとぬれたる土をふむこともいま慰めの一つなりけり　同

香具山をおりきてこひし一つきの水のつめたさ霧がひせる家　松平操子

名もしらぬ山奥ふかくまよひきてここに寂しきわれ一人なり　米倉久子

あひがたき夕べはかなしほうづきはわが唇にやるせなくなる　山田お葉

空をうつし波のあいろのさまざまにわがのる船の一路寂しき　鵜本よれ

大日輪のぼりつくせばあはれ又わが寂しさはよみがへりきぬ　同

蜩もかなかな蟬もそれぞれになきくらしつつあきのかぜふく　世良田優子

豆腐屋は角をまがりてゆきけらしこの秋風にふかるるがみゆ　同

折りにふれて

——日記より——

岡田ゆき

矛盾。此の言は常に私につきまとつて私を苦しめる。自分の心と行爲がまるで矛盾して居る。それは甚だいけない事である。然し矛盾と稱する溝は至る處に横たはつてゐる。そしてやゝもすれば落ち込むのである。此の溝に私は片足でも落したと氣がついたら一時も早く淸い水で洗はねばならない。

私は矛盾にさらはれぬやう心がけねばならぬ。

昨夜、床に入つて、ぼんやり考へてゐる時いつに潤んだ星が光つて居る。天空の一端を破れ竹でびし／＼とたゝく様に神樂の太鼓の音が聞える。おうさうだ。今夜は八月十三日だから八幡宮の御祭りなのである。幼い折りに、乳母とよく行つたつけ。カンテラのあくどい、灯影をうけて顔の輪郭が濃くきはだつてゐる男が咽喉を締められる様な聲を出して客をよんでゐるのに、木戸錢を渡して、乳母は、私を人込みの小屋に伴れて入り、おどけ者のお揃ひの猿芝居を見せた事もあつた。

歸途、札の辻の氷屋で休むのが例であつた。粗末な匙で氷をつゝつきながら、其の頃札の辻にあつた、電燈會社の大きなアーク燈に澤山、蛾が群らがつてゐるのを、まぢ／＼と眺めて居たものだ。

幼い時分は總ての、事物について思索する事をしないで只、單に事實として、受け入れるにとゞまつて居た。其の頃から、「何故、自分はかう思ふのか。」などゝと云ふ事に就いて考へつけてゐたら、よかつたらうに。然し幼い人達は野に生へた雜草の様なもので、心ある人が、其の一本をぬき取つて來て、庭に植へて育てると、美しい花

が咲く樣に、智的な頭を持つた人が敎へ導いて行く必要があると思ふ。そんな幼い日を思ひ出したゝめに、今朝は何時にない神輿を見る氣になつて、行列が聖坂を登る時裏門の處で獨りで見物した。

私は近眼の上に、かなり離れて居たのではつきり見へなかつたが、幼い頃の懷疑的な眼をもつて、心に刻まれて居たものとは、非常に變つたものであつた。

"The tide is out, but it will noon be again."

これは Joaquin Miller が彼の母の死後ある人に語つたものである。Tide とは死をさして居るのである。さあつとよせて來た潮の樣な死（生物の不可抗力。）に老ひたる母を伴れ去られた。彼の其の時の心はどんなであつたらうか。

此言葉を靜かに、くちづさむ時、私の心に、偉大なミラーが、ダイアモンド、ヒルの高丘に座して、血の滴りの樣なポッピイを眺めながら、瞑想にふける樣が描かれる

そして、二度、三度とくりかへして居る内に、何とも云へぬ力が、私の心をぐつと捉へる樣に感じられる。それはたしかに、異常な彼の人格の魅力にほかならない。と考へる。

考へてみれば彼の言にたがへず再び寄せた潮は、彼を伴れ去つたのである。

黒靑い空に明日の暑さを暗示して居る樣に星が輝いてゐる夜、TさんとYさんが遊びに來られた。私の部屋の南向きの椽に近く座つて三人で話した。なかに次の樣な事も語りあつた。

T。ひどい、「尼殺し」の犯人がつかまつてね。

私。大米龍雲でせう。ひどい奴だわ。けれどありや普通ぢやないわね。病的なんですよ。

Y。さうね。病的かも知れないわね。

T。何のために、あれ程の事をしたのでせう。

Y。臆測すればどんなにでも考へられてよ。

私。さう。私はね、こう思ふの。尼さんてものは、裏面に種々の事があつて、所謂女と少しも變つた處はないのに、いやにとり澄ました樣子をして、お高くとまつてゐるから、龍雲が一種妙な衝動にかられて、彼等を普通の女の位置迄引摺り下して一般の女に對して行ふ罪を犯して快感を覺えて居たのではないでせうか。それが尼さんに對して行はれたと思ふと。何とも云へない皮肉な氣持ちがしますよ。

T。そりや面白い考へだわね。けれど恐らく彼はそんな考へはなかつたでせうよ。彼は坊主だつたゝめに、尼さんの弱點をよく知つて居るのよ。その上、内部にも出入しつけてゐたので、あんな事をしたのだと私は思ひますわ。

Y。貴女達の考へが兩方とも、さうだつたとも、さうでなかつたとも云へてよ。どうせ臆測すると云ふ事は不可解を意味するのであつて、眞實はやつぱりやつた當人でなきや、わかりつこないと、思ふの。

T。さうねえ。

三人が三人とも、皆ちがつた事を考へて居る樣に默つてしまつた。

星は相變らず輝いて居る。二三日前に目黒華壇から貰つて來た、ゑんまこほろぎが三人の間にはびこる沈默をかゝり合せる樣に鳴き出した。何となく秋らしい心地がする。

（大正四、九、六）

智慧子夫人の死

生田花世

　この宇宙には千種萬様の音響があり、光線があり、色彩があつても、人間の官能が僅かにその一部しか受け入れる事が出來ないものとすれば、最低と、最高とに對して人間の官能が全く盲目であり聾であるとすれば、また私たちの意識も、至高者、至淸者に對して必ずや盲目であり、聾であるであらう事に疑をいれる餘地はないのである。そのため豫言者はその村人に認められず、よき女は人に認められずして、默つて此の世を退いて行つて了ふ。

　白い薔薇の花輪が七つばかりそこには重ねかけられてあつた。白木の寢棺に近づいて、私は懷かしい人の遺體に最後の別れを告げようとその上部に篏められた方形のガラスの上に眼を止めた時、嗚呼！　何たる驚異であつたであらう！　私は身體が竦み、胸のあたりの血の高く鳴るのを感じつつ、おもはず顏の赤らむのを覺えるのであつた。それは如何に壯嚴なる美貌であつたらう！　死の蒼白はほんのりとした匂ひに和らげられ、人にすぐれて輪廓の大きかつた顏は、死の威嚴を盛る二つとはない立派さに輝いてゐた。表情を示す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にいつも生々としてゐた双眼はかたく閉ぢられて靜かに線となつてゐた。鼓動する胸を制しながら、この美しい死顏に無限の哀別を覺えながら、しかも一道の明るさを感じながら私はやがてそこを去らねばならなかつた。けれども私は家の裏の井戸の方にと出て行つて懷から紙を取り出し、鉛筆を押し當てつゝ、瞬間の心の驚異を記錄しようとしたのであつた。

われ今御身にもの言はん。
この心にまつはれるもののすべてを振ひすて、
ただひたすらに御身を凝視して、
わが心をば言葉とせん。

故人に對する盈太郎氏の詩集「凝視」はまことに嚴かなる涙痕によつて彩られてゐる。私は一度となく二度となく、三度となくそれを讀んで暗涙に眼が曇つて行くのである。

私はすつかり盲目であつた。私の耳は聾してゐた。私にはお智慧さんのあの「默つた生活」が當時少しも分らなかつたのである。私は何故、お智慧さんはあんなに默つてゐるのであらうと思つた事さへもなかつた。お智慧さんは私なんか駄目でございますわと云つて穩かに笑顏をするのが癖であつた。文學者の妻になんぞなるものではございませんわとお

智慧さんは云ふのであつた。家を持つたら私の事を思ひ出すでせうね、とお智慧さんの云つた聲が私の耳には時々よみがへるのである。

今私はかうした文士の妻となり一歩一歩お智慧さんの生活にと私の生活が類似してゆくのである。そして私には日に日にお智慧さんの生活に對する尊敬の念が増して來る。

智慧子夫人の死に至るまで貫かれたる愛のいとなみが、愚かな私に限りもない教訓をあたへてくれる。

私達の過去は
互に肉迫し相搏つた、
私のからだに生えて居るとげが
御身の全身を刺した。

とげがいくら身體を刺しても、血潮が流れつゝも、彼女は愛する夫を永遠にと默つて抱いてゐたのではないか。本當にあの生活はえらい生活であつたと思ふ。

戰禍

齋賀琴

人間の歴史は戰爭の連續であると申します、事實左樣でも御座いませう、人智の發達しない太古のその頃から科學文明の著しい進歩を來した今日に及びますまで、幾代幾世紀の間、人類は互ひに血を流し、虐殺し、侵略して參つたので御座います．昔を野蠻と罵り、今日を文明と誇りますものの、その實今日の文明は野蠻だと云ふ昔の虐殺、侵略を一層甚しくするための手段として用ゐられて居ります。勿論これは一面から見た話で御座いますが、併し現在世界の先進國と呼ばれる國々が互ひに干戈を交ふる事一年餘、いつと云ふ平和の見込みもつきかねます今日では、戰爭の殘酷さと、直接、間接に及ぼす災害の莫大な事を考へますと、同時に所謂文明の恩澤とか科學の貢獻とか申すことを疑りたくなつて參ります。恐ろしい戰爭の慘禍は只に幾多の貴い生靈を犧牲にし、その白骨を風雨に曝すばかりではなく、殘された人々の上に負ひ難い苦痛を授けます。一國にとりましても勝敗何れにかゝはらず、損害を齎らすもので御座います。何故に人類は多額の費用と時と知識とを無益にして徒らな殺生に耽るのでせうか！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人間本來の野性が血を流す事を喜ぶために永久に戰爭が存在するので御座いませうか、眞に人類が向上し、進步したならばこんな馬鹿げた慘事は消滅するものでせうか。それとも戰爭は人間生活の秩序を保つための一手段として神に依て行はれるものでせうか、それとしては餘りに殘忍な事實ではありますまいか。

私は只今戰爭の議論を致そうとは思ひません、實は私自身に可否の理由がはつきりしないので御座います、しかとした考へを言ひ張るだけの深い硏究もないので御座います、只私は女性として――殊に女の中でも氣の弱い女としてなるべくならば戰爭を免れたいと願ひます、否絕對になくて欲しいと思ひます。自分が從軍する事は愚か、自分に近しい人々に――惹いては人類一同に――戰爭の禍ひを浴びせたくないと思ひます。

考へても御覽なさいまし、自分の父や夫や子供が地雷火の上に飛行器の下に、危險な瞬間を過す樣を、砲彈の煙の眞暗な中に突貫して行く有樣を、傷いて倒れた塹壕の中に二日も三日も苦しんだあげくたつた一人天を睨んで死んで行くその心持を。

誰で御座いましたか「もし婦人が戰場に立つたらば戰爭は止むであらう、婦人は戰爭の慘禍を見るに忍びない」と申しましたがまつたく左樣で御座いませう、慈悲と愛とを生命とする婦人に何で人が殺されませうか、母たる資格のある婦人は決して戰陣に立つて血を

見る事は出來まいと存じます。

理屈は云はないと申しました、只私は先年日本と露西亞が戰つて居りましたあの頃に私の郷里で起つた事をお話したいので御座います。それはその當時のありふれた事かもしれません、ありふれた事だけに猶一層注意せねばならぬので御座います、戰爭に依て起された悲劇の一つ――とでも申しませうか。

私の故郷――戸數二千戸に足らぬ片田舍の小さな町からも多くの人が軍籍に居ました、そして戰爭が始められると共に續々出征の動員令を授けられました、その頃小學校に居ました私はよく先生に連れられて、出征の兵士を見送りに町はづれまで行つた事を昨日のやうに思ひます、きらびやかな旗を風になびかして、樂隊なんぞではやし立てゝ、黒紋付の人が大勢、赤い顔をしてついて來ます。

「何々君萬歳！」

と旗をふり立てゝ呼びますと生徒は一齊に手を擧げて同じことを聲一杯くり返して叫びます、人身御供にあがる、當の出征軍人はドキマギしたやうな、困つたやうな、讃め立てられて喜しいやうな面地でお辭儀を幾つも〳〵致します、そして生徒や町の人などに別れを告げて、その屬する聯隊へと向ふので御座いました。その時私は田圃の向ふへだん〳〵小

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さくなつて行く人の後影を見て、子供心にも何となくうら寂しい思ひに打たれたので御座います。

私がお話し致そうと思ひますその主人公はかうして町はづれまで送られて、萬歳を云はれて出征したのではありません、現役の務が終らない中に戰爭が始まりましたので、眼前に迫つた除隊の樂みも仇となつて、隊からすぐ戰地へ參つたので御座います。

それは私の祖母の實家で御座いました、隣村との堺の養老川と云ふ小川のそばに家を建てゝ百姓をして居ました、町にも――私の家のすぐ近所でした――古びた家があつて、兩方にゆきゝをするのでした。

老夫婦――私は叔父叔母と呼んで居りました――の子供は二人あつて、どうもあまり評判がよくありませんでしたが、二人とも兵隊にとられて二人とも戰に行つたので御座います。なんでも野戰砲兵とか云ふ事でした、雲つくばかりの背の高い、がんじやうな人たちだつたと覺えて居ます。

二人の息子を戰爭にやられた親の心！あの當時の叔父叔母の元氣のない、生きてるか死んでるか分らないやうな顔付を思ふと今でも私はぞつとします、人の手前を考へてか、口ではあんまり申しませんでしたが、それだけ一層心の中はたまらなかつたらうと思ひます。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

皆が戰爭熱に浮かされて、氣違ひのやうに騷いでる中に、寢ても覺めても案じるのは自分の息子の事ばかり、勝つても敗けても、只息子さへ助かつたらと思ふのが果して、無理で御座いませうか。

次男の方は幸ひに獨り身でしたけれど、長男は兵役につく一年前に近在から嫁を迎へて居ました、昔からの親類だそうで、まだ十六の少女でしたが人形のやうに、お祭りに招ばれでもしたつもりで、輿入れしたので御座いませう。

私はこの若い何にも知らない花嫁を氣の毒に思ひますと同時にその傷ましい運命を怪しまずに居られません。二十に足らない若い妻は夫の留守に生れた女の子と、老耄した――忘れましたが叔父叔母の父がまだ生きて居りました――舅の世話をしながら、町の家を守つて居たので御座います、日中でも陽のさゝない、陰氣な、椽の低い古い家を私はよく覺えて居ます。

その舅は永年中風を患つて精神も餘程違つて居ました、殊に孫達が出征してからは、よくあらぬ事を口走つて、若い嫁――おかつさんを困らしたものださうです。

「おかつ、おかつ、大變だぞ、露助が攻めて來たぞ」そんな事を叫びながら夜中に家中驅けまわつて、何とすかしてもきかない事が毎晩の事だつたそうです。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「可哀相に、おかつさんも苦勞をする」

近所の人は左樣云つて居ました、いつも束ね髮で盲目縞の筒つぽを着て、お襁褓を洗つたり、裏の畑を耕したりして居た、いぢらしいおかつさんの姿を私もちよい〳〵見かけたものでした。小じんまりとした内氣そうな人で割合に言葉づかひも整つて居ました。自分の家より外の世界を一寸も知らないで育つたおかつさんは一を以て十を推すと云ふ鋭敏な感能はありませんでしたが、何處か子供のやうな初々しさが見えて、可愛らしい人で御座いました。川の傍の舅姑の家へもよく手傳ひに行く樣子でした。

その時分、戰爭の經過がだん〳〵進んで行くと共に、愛國心、敵愾心を皷舞させる、種んな方法が行はれました、新聞は盛に書き立てます、誇張的な文字の大きな活字が毎日の新聞に絕えません、まだ生死の程もハッキリしない者を名譽の戰死者、光榮ある犧牲者などゝ無暗に稱賛してしまひます。冷靜に考へてみたらずいぶん滑稽な間違ひもあつたやうで御座いますが、萬人が萬人、戰爭熱に醉つて病的になつてゐる頭では、そんな事に氣はつきません、來る日も〳〵號外の來る事ばかり樂しみにして、仕事も何もまるつきし手につかない有樣でした。號外の鈴らしい音が聞える、ともう大根を堀つて居た者も麥な打つて居た者も誰も彼もが洗足のまんま、一目散に驅け出して一刻も早くと我先に號外の紙

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

きれを奪ひます「我○軍大捷至る處敵なし」と云ふ類ひの活字でも見えますれば一齊に歡呼の聲をあげます。本當に萬人が萬人無邪氣な子供のやうにはしやいだので御座います。

小學校でも「戰爭」と云ふ事について特別な注意を以て敎へたので御座います。柔かい純粹な小い國民の頭へ「大和魂」と云ふ事を盛に吹き込まれ、「國體」「皇室」を尊重するやうに、と云ふ訓戒が激しく注入されたので御座います。勿論それは當局からの訓令もあつた事でせうけれど、それよりもむしろ、國民の一人である小學校の敎師には遺傳的にこの熱狂的な大和魂の血が流れて居たからで御座いませう。

生徒はよく戰死者の葬式に參りました、紅白黃、さまざまな旗が寂しく風にひるがへつて、曇り空の今にも降り出しそうな夕暮の、あの悲しい傷ましい葬式は本當に不快な思ひでした。きまりきつた町長の吊辭、譯の分らない坊さんのお經、一時間も二時間もお寺の庭に立たせられたものでした。

私は忘れられない一つの記憶が御座います、はじめは首府の東京で行はれた祝捷會と云ふ御祝が全國に流行り出しまして、私の町でもやつぱりそれを實行する事になりました。近在の村々に機先を越されてちと出し遲れの氣味はありましたが。

町中の人の頭が祝捷會の事より外何にも考へられません、準備の一週間ばかりと云ふも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の商人は仕入れを休み、百姓は野良を休んで飾り物の製作に夢中でした、私の家は商家で御座いましたが店の者はみんなして萬國旗を染めるために苦心慘膽たるものでした。叔父が英語の辭書の卷頭にある萬國旗の繪を手本に、よく丹念に染めあげたものでした。

當日には町の重だつた處——學校の前とか倶樂部の前とかお寺の前とかに無細工なアーチを立てゝその旗を四方へつるします、紅白だんだらの布を卷きつけた柱が縱橫に組み合はされて軒には「奉祝」と書いた提灯が家並にかけられます、そして商賣家の店先には人形の軍人や軍艦や、城砦などがこれ見よがしに飾られます、私はどうしたものかその少し前から風邪を引いて、熱がありましたので、晝間の旗行列に出る事も出來ませんでした。戶外のざわめく樣子が耳へはいつて、とてもじつとおとなしく床になんぞ居られませんのですけれど、母に叱かれ〳〵してやう〳〵引込んで居りました。

「一寸位いゝでせう、おぶさつて行けば」

夜になると堪らなくてとう〳〵かう云つてせがみました。母もよく〳〵可哀想に思つたと見えまして、負さつてならいいと申すので御座いました。寢卷の上に羽織を引かけて店の土間の方へ出ますともう戶外はまぶしいやうに明るくて大勢の人の騷ぎ聲がします、私も何となく興味をそゝられまして、

「早くよう」

と女中を急ぎ立て乍らおぶさらうとしますと——

覺えず私はギョッとしたので御座います、土間の隅のうす暗い處の腰かけに蹲つて居る小さな姿が——それはおかつさんなのでした。

「あら！」

と云ふと同時に女中も氣がついたと見えまして、

「姉さん、姉さん、」

と呼びかけます、

「どうしたの、あんた、見に行かない？」

と構はずに大聲で云ふ私の言葉が聞えましたやうで、はつとふりむいて見ましたが、燈火を受けたその頰にあり〳〵と見えましたのはたしかに涙のあとなのでした。子供心にも氣のつかない惡い事をしたと思ひまして、氣の毒なやうな、氣まりの惡いやうな、何ともしかねてもじ〳〵しますと、同じ樣に當惑した女中がそれでも突差に

「姉さん、一緒に行きませんか、町へ、——如何で御座んす、戰地から便りは——」

「ちつとも——ちつとも來ないんですよ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

やう〳〵聞きとれる程の低い聲で云ふかと思ふと立ち上つて、しひて笑ひながら、

「お桂ちやん、お風邪はよう御座んすか、赤ちやんのやうですね、おんぶなんぞして」

「え〻」

と私も笑ひましたが、わざと子供らしい調子で、無理に女中をせき立てゝ屋外へ出てしまひました。

丁度提灯行列の人々が上町からおしかける處でせまい道路は一杯に老若男女がつめかけて居ます、三河屋と云ふ呉服屋の涼み臺の上へ下して貰つて、私と女中は行列の通るのを待つて居ました。

勇ましい軍歌の聲を先觸れに男生徒が足袋はだしで進んで來ます、四五名の教師が同じ樣にほゝづき提灯を高くあげて「討てや懲らせや」を叫びます、背後からは町の人々がめい〳〵思ひ〳〵なりで、中には千鳥足ひよろめき乍ら無暗に「萬歲々々」とどなるものや、とりとめもない事を口走る者もあります。

行列が通つてしまつたあとは寂然（ひつそり）して町の明るいのが殊更に淋しいやうに思はれます。女中は疲勞れたのか涼み臺へぺつとり腰をすゑて、なか〳〵負つてくれません、私も何となく變な心持になつて默つて空をみつめて居ました。する中に後ろの方で話し聲がするの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

です。

「内地ぢやこんなに騒いでるがなあ、戰爭あしてる者の身になつてみろ、祝捷會どころぢや無えんだ」

びつくりしてそつとふりかへりますと町では誰知らぬ者のない、あの不具の翁なのでした。日清戰爭の時に片腕を失つたと云ふあの意地つ張りの老兵でした。

「左樣だらうねえ、お爺さん、お前さんなんざ身に覺えがあるからねえ、私なんぞも息子の事を考へると、こんなお祭りなんか、本當にいま〳〵しくなつて來るよ」から云つて調子を合はせますのは一人息子を召集された近所の疊屋のおかみさんでした。

「今夜一晩の中に何千つて人が死ぬか分ん無えだ、樹も草も無え廣つ原によ、血だらけになつてゴロ〳〵して、呼んだつて、呻吟つたつて誰も來てくれるぢやなし末期の水も飲め無えで、もがき死に死んぢまふんだ、なあおかみさん、自分の息子や兄弟がそんな樣だと考えたら、こんな馬鹿騷ぎが出來るかい！たらふく飲みやあがつて、擧國一致も無えもんだ、それよりやあ、國のためだ。鞋でも造るがいゝ！」

お爺さんの聲は段々高く鋭くなつて、今にも打つてかゝりそうな氣合なので、私は何だか恐くなつて來ました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「歸らうよ、ね、お母さんが待つてるから」

さゝやく様に女中を促して、もう見殘した飾物はそのまゝに歸つて來たので御座います。その晩の記憶の中にあの傷ましいおかつさんの姿と、激昂したお爺さんの聲とだけはいつまでも忘れられぬので御座います。明るい灯の中の暗い心が鋭く幼ない心に刺し込まれたので御座いました。

さておかつさんは——その後のおかつさんの話は世にもあはれなもので御座います。身に引受けて看病した老舅はとう／＼戰爭中に死にました、亡くなる一週間ばかり前は人の見界ひも失せてしまつて、

「あゝ露助が露助が——國次(息子の名)が——殺される、殺される——」

とばかり云ひつゞけて箒をかついて馳け廻つたり、家中に水を撒くやら、手當り次第に物を投げるやらして、隨分困つたそうでしたがそうしてとう／＼暴れ／＼て死にました。お葬式の時は私も白い着物を着て見送つたやうに覺えて居ます。

おかつさんはやはり町の家に今度は子供と二人ぎりで暮しました、時に姑が見まつてはくれましたけれど夜は屹度歸つてしまひます。たゞつ廣い陰氣な家に子供相手に夜を更かすのがどんなに切なかつたでせう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戰爭はなか〳〵止みません、一月二月と月日は人を僞はるやうに過ぎ去つてしまひます。祝捷會は二度も三度も行はれます、旅順が落ちて、遼陽、沙河、奉天、と味方の軍勢は到る處大勝利の報が聞えます、けれど出征した者は一人として歸つてまゐりません、否今日は何處の息子が死んだと云ふ報せが來た、彼處では葬式だそうだ、と云ふやうな恐ろしい噂ばかり聞えます、そして一層怖ろしい事は――なほその上に召集令が下るので御座います。豫備も後備も免れた、年老つた人までが撰出されるので御座います。

戰爭はいつ止むだらう、――左樣云ふ疑問が人々めい〳〵の心に暗然と浮んでまゐります、そして只絶望の嘆息を人しれず洩らすのみで御座いました。

おかつさんの若い心はどんなにか夫の凱旋を待ちあぐねた事でせう、冷淡な舅姑の心が悲しかつた事でせう。併しそれを一言でも口にするおかつさんではありません――そしておかつさんはつひに氣が狂つたので御座います。

最初は發作的に頭腦が亂れるばかりでしたがだん〳〵病勢が進行して、平常の意識に歸る事が少しもなくなつてまゐりました。幾度か自殺を計りましたのを近所の人々から救はれました。實家からは心配して看護人をよこします、子供はお祖母さんに世話をして貰ふ――と云ふ事になつて、川の傍の家へやられました。

そうしておかつさんは町の家に看護人と二人で居たので御座います。お醫者は過度のヒステリイだと申すきりで、何の手當もしてくれません「氣違ひ」と云ふ事に怖氣を起して肉親の者さへよりつきません。狂ひに狂ひ悶えに悶えた果におかつさんはとう〳〵悶死したので御座います、看護人の目を盗んで井戸へ投じたので御座います。

「可哀想に、よくお念佛をしてあげなさい」

お燒香をする時に母はかう申しました、可愛らしいおきぬちやんがお祖母さんに手を引かれて笑つてるのを見ると私も涙がこぼれました、そして何とはなしに母の袂にすがりついたので御座います。

おかつさんは死にました、それから二三月經ちますと講和の噂が立て、やがてあのポウツマス條約が結ばれていよ〳〵休戰となりました、そしておかつさんの夫――國次さんも目出度く凱旋したので御座います。

歡迎の日、大勢の迎ひ人にとり卷かれ乍ら、町へはいる時の國次さんはどんな心でしたでせう。急造りの凱旋門の下に立つて私は破れた軍服を着けたその姿を見ました、滿州の風雨に曝されてやつれはてたその顏を見ました。そして「あゝおかつさんが居たならば！」と心の底から熱い涙が湧き出たので御座います。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

まだ子供だつた私はこみ入つた内輪の事情を何にも存じませんでした、聞く折もありませんでした。大人の心持もよく分りませんでした。けれどこのあとの國次さんの家が如何なるだらうかは幾らか氣になる事でした、そして、十才にもならない母なし子のおきぬさんがいぢらしくて堪りませんでした。

其後一年ばかりたつて、おきぬさんには新らしいお母さんが來ました、やつぱり近在の、これも親類からだそうでした。そしておきぬさんは叔父さん――國次さんの弟――と二人で町の家に住んで、お祖父さんお祖母さん、とお父さんと新しいお母さんは川の家に住ひました、それはおきぬさんが學校へ通學する便宜上定められた事でした。

やがておきぬさんには弟と妹が生れました、けれどその子供達は大きくなつても川の家から離れませんでした、おきぬさんは相變らず陰氣な家でその頃流行つた内職のまようず細工なんかして居ました。そして成人してまゐりました。

ついこの頃そのおきぬさんが死んだので御座います。丈夫な、殺しても死なぬやうながんじやうな子で御座いましたが、急に十日ばかり患つて苦しみぬいて死んだそうで御座います。

何と云ふ可哀相な子だらう。私は左樣思つて胸が一杯になりました。いつも淋しそうな

顔をしてロク〳〵物を云つた事もない、いぢけた子供で御座いました、東京へまゐりましてから私は歸省するたんびに簪のやうなものをお土産にして喜ばせてやりましたが、今年はもうそんな樂しみもなくなつたので御座います。丁度新盆で御座いますから、好きだつたお菓子でも供へてやりませうかしら。

十年前の戰爭の名殘りが今日まで續いたので御座います、夫が出征の留守中に狂ひ死んだ若い妻、その形見の子の薄幸な運命を考へますと、あの大きな戰爭の影響の極めて小さな一部分さへも誠に恐れられるので御座います。そして私は國家と國家との關係を離れた、自由な大きな美しい人間の世界を、まぼろしのやうに思ひ浮べるので御座います。「汝等互ひに愛せよ」と教へた基督の言葉が懷かしくなつてまゐります。

何故人は互ひの幸福をはからぬのか？左樣思つて、悲しむので御座います。

――八月四日――

斷章

野　枝

○

何をしても何を見ても一つ〳〵それを考へ批判せずにはゐられない自分が時々煩さくなつて來ることがある。見まはすと今私たちの周圍にはそのやうな複雜な內的生活をもつてゐるやうな人は見當らない。そして皆呑氣に樂しさうに働いてゐる。

お仲さん――私のゐる家の直ぐ前の礦泉場の女中の名――は何時でも呑氣で快活な人だ何時でも何の苦勞もない樂しい日を送つてゐるやうだ。私はもう丸三月每日彼女の顏を見ない日とてはない位だけれども且つて一度もその不快な顏付を見たことがない。どうしてあゝしてゐられるのか知らと思ふ位だ。彼女は大ぜいの人の中にゐて忙しい仕事をしてゐる。そしておなじ雇人仲間の者からさへつけ〳〵口をきかれたりずゐぶんつらさうなことも幾度も見かける。けれど彼女は何時でも且々としたおなじ調子で物を云ひおなじ態度で仕事を續けてゐる。しかも何かつけ〳〵小言らしい口ぶりを洩らされても「ウムさうかさうか」と云つたやうな調子で私たちの目から見てゐるとお仲さんの態度は小言を云ふ位置

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の人よりもずつとたちまさつたやうに見えて、私は何時でも感心する。彼女は無意識の間に何時でも相手のコセ〳〵した感情からはるかにぬきんでゝ遠くから小言でも惡口でも受けてゐる。他人に使はれてゐると云ふやうな卑劣な根性はお仲さんにはなさゝうだ。何時でもゆう〳〵として自分の仕事をしてゐる。體もいゝ體をしてゐる。どんな嵐の日にどんな處に使に出されてもいやさうな顏をしてゐない。何時でもおなじ調子で鼻歌かなんかでゆつくり大きな體を運んでゆく。恐らくこの人は今私たちが此處らで接する人では一番氣持のいゝ人の一人であらう。私はお仲さんを見てゐるとつく〴〵羨ましくなつて來る。お仲さんが私たちの家の前を通る度びに私たちは顏見合はせて微笑する。

「呑氣さうですね」と私が云へば、

「英雄だね」と後姿を見送りながら良人が答へる。私たちは本當にたまらなくお仲さんののびやかな心持が欲しくなつて來るのだ。

それから矢張り直ぐ傍の貯炭場に働いてゐる仲仕たち――仲仕と云へば非常に荒くれた人たちを想像せずにはゐられないけれど此處に働いてゐるのはこの土地の人たちばかりでそんなに素情の惡いやうな人たちは少しもない。その人たちは皆めい〳〵のちやんとした家庭をもつてゐてぢみちな暮しをしてゐる人たちばかりだ。そしてその中には女もまぢつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てゐる。その人たちのうごかすショベルの音が絶え間なく私の家の中まで聞こえて來ます。それは夜私たちが眠つてゐる間も續けられて居る。私たちが何時目をさまして見てもその炭をすくふ音がしんとした空氣を動かして居る。私たちにはどうしてさうも働けるのかと不思議に思はれる程だ。二十分間位ひに炭車が小さな機關車に引かれて二輛三輛づゝ一ぱいに堀り出されたばかりの石炭をつんでは持つて來る。それをうつしておいては此度は其處の棧橋についてゐる船の中にその石炭をかつぎ込むのが彼の人達の仕事なのだ。私たちの目からはそれは〳〵過激すぎる程の勞働だ。けれども彼の人達はそれを樂しさうにしてゐる。ショベルの姦しい音にまぢつてその人たちの自由なのびやかな笑聲や話聲が絶え間もなく聞えて來る。お天氣のいゝ日などはわけても長閑かな氣持ちで眺められる。いろんな噂ばなしがつぎ〳〵に一人々々の口から洩れてゆく。そうして皆が單純な感激をもつて一つ〳〵にそのうはさのかはる度にちがつたそれ〳〵の興味に引き込まれてゆく。さうして休みなく働いてゐる。話も亦休みなく流れてゐる。私は何時でも靑い海と眞黑な石炭の山を背景にして一生懸命に働きながら何の苦悶もなささうに他人のうはさに沒頭しながら其日々々を送つてゐる人々を見る度びに如何なる差異が安易な彼の人たちの生活と苦澁の多いもがいてゐるやうな自分たちの生活との間にあるかを考へずにはゐられない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

○

小さな眠つたやうな村にも矢張り事件と云ふやうな物が怠屈な人々にいゝ話柄を與へる。

私たちが此處へ着くと間もなくの事であつた。長年肥前の山中にゐて木挽をしてゐた七十にあまる老人が廿あまりも年のちがつたその妻君と私の村はづれに來て住んでゐる。その老人は長年つましい生活をして千圓に近い金をためてその金を樂しみに抱いて生きてゐたのらしい。處がその妻君と云ふ婆さんが何を思つたかその金をみんな、そつくり出して石とつめかへて持ち逃げをしてしまつた。氣の毒な老人は、氣を脫かして泣いて死を願ふ位に泣みぢめな境遇におかれた。人々はこの老人に同情して手を分けて老婆の行衛をさがしたが皆目わからない。「おぢいさんが可愛想だ」とは皆が皆思はぬ人はなかつたであらうがどうすることも出來ない。四五日もすると人々はもうあんまりその話をしなくなつた。それでも氣の毒な老人にとつてはこれは實に「いのち」にも關する重大事件なのだ。私たちはその話をきいたときに先づその千圓と云ふ大金が無責任な人々の頭で考へても可なりな多額な金であるのに、毎日々々老人が何十年と云ふ間かゝつてあの大鋸をかゝへては僅かに得る金の中をさいてためた金である。老人にとつては他からの同感よりも幾倍幾十倍か

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も尊いものでなくてはならないと思ふと涙ぐましい程老人が可愛想になつた。

他人は漸々忘れかけて來る頃になつても老人の涙はかはきはしなかつたであらう。處が十日あまりもすぎた頃に或夜ひよつくり老婆はその金を背負つたまゝ歸つて來た。人々は吃驚した。老人はどんなに安神したであらう。けれども誰にでも不思議に思はれるのは老婆の心中である。彼女は持ち出す時には勿論それを自分ひとりのものにするつもりであつたのであらう。併し一たん出て人目をさけながらその大金を――それは悉く現金であつたさうだ――背負つて歩くと云ふ事を確實に自分で考へたとき彼の女は種々な恐怖で一杯になつた。併し彼女は出かける間際までのいろ〳〵な計畫やまたは手段、それから後のさはぎなどのことを考へると出來る丈けその恐怖と爭ひ通したのらしい。しかも彼女はその背負つてゐる金をどうしても使用することも出來ないやうなはめになつて來たと思つたときにとう〳〵その抵抗に負けて仕舞つたのだ。それは極めて自然な心持であるに相違ない。私はけれども彼女が出かけるまでの周到な用意と手段を聞いて想像したのとはちがつて案外たやすく抵抗にまけた意久地のなさを不思議に思ふ。けれども一方から考へるとそれは極めて當然なことでもある。何故と云ふに彼女に實際それ程の大金の必要があつたか？と云へば決してなかつた。今切に欲しい何の理由もない。たゞ漠然とした欲に動かされて發作的

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に持ち出したい云ふ一心になつて兎に角持ち出す迄の計畫は綿密にやつておいたが彼女はそれから先は考へなかつた。持ち出すと云ふこと丈けで彼女はもう自分のものにしたつもりであつた。それから先きのことはさまで考へなければならないやうな氣もしなかつたのらしい。それは彼女が必要にせまられてゐなかつたせいでもあらうか。彼女の目的は持ち出すと云ふこと丈けであつたのだから。若し反對に何か目的があつてその千圓の金がなくては生きてはゐられないと云ふやうな切に／＼欲しい場合には持ち出す位が問題ではなくはやくその金を役立たせると云ふ事の爲めに全力を傾けるであらう。そしてそれは恐怖を長くつゞけて持ちこたへてゐるやうな餘裕を持つことは出來ない程迫つた氣になるであらう。金は消費する時に丈けしかそれ自身の價値はないものだ。消費の方法を知らないものにとつてはこれは明かに一つの重荷でなくてはならない。金を使ふ爲めに持ち出すのならば徹底した意味があるけれども、漫然と使ひ道のない寶を自分が持つより他人が持てば一層有益に使はれると云ふことを知りつゝ背負つてゐることはこれはたしかに恐ろしいことである。厄介な荷だと云はれなければならない。しかもその有がた味を知つてゐる者程恐怖はひどいに相違はない。彼女はそれ程深くは考へなかつた。「持ち出しさへすれば」と思つて出たけれども彼女は自分にその大金を保つ力のないことを知つたのだ。そしてとうと

うそれを再びもとの場所に迄持つてかへつて來た。老人に幾日かの間はげしい苦痛を與へたと云ふ點から見れば老婆の行爲は全くよくはない。惡むべきだ。併し一方から見れば自分でよく〳〵しつかりした根據もなしに大事を決行したのは一寸した欲望の發作である。彼女がその爲めに自分もまた老人とはちがつた心持ちでどの位大きな苦痛と戰つたかしれない。そして彼女は本當にいゝ經驗をしたことになるのだ。そして老人とは同じ程度に矢張り苦しんだに違ひない。すればそれですべてが償はれて仕舞つたことになる。あの人たちはそれでもうおさまつたのだ。老婆もまた可愛想な小さな善人だ。老人もさうだ。

私はその事のあつた暫く後でその老人夫婦が私たちの家の直ぐ前の湯に這入りに來てのかへりに二人で棧橋を往復して船の中に石炭をかつぎ込んでゐる仲仕たちの目ざましい勞働をボンヤリ眺めてすべてを忘れてゐるらしい姿を見かけたときにそんな理屈を考へてゐた。

○

「Sさんが子供を生んだ。と皆が物珍らしさうに話をしてゐる。Sとはこの村の東のはづれの山の根に小屋の中に住んでゐる女の名である。

「誰の子だらう」と云ふ者がある。それはSは父親と二人で住んでゐるからだ。彼女はも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とは相當にチャンとした家に住んでゐた。もう三十をこした女だ。私が子供の時分私たちの家のある海岸からすこし山の方にはいつたAと云ふ處にその女はゐた。そして私たちはたしかに氣狂とか狐つきとか云つてゐた。其後私が時たま歸郷するやうになつて私たちの村の中に菓子屋などをはじめて氣狂はなをつてゐた。けれども矢張りうす氣味のわるい氣狂めいた處は失せなかつた。此度かへつて見ると彼女はとう／＼小屋の中にまで起臥するやうになつたらしい。私は直ぐとあの小さなこはゞつたやうな感のする黄色い顏を思ひ出した。私も矢張り他の人のやうに、

「誰の子だらう？」と云ふ疑問を眞先きに持つた。そして始めその問を出した時まで私のこの心持には他の人々と同樣にふまじめな好奇心が多分に手傳つてゐた。けれども私の心は少したつと他の方に向つて動きはじめた。それにはさもしい卑しい欲望ばかりからさうした女を誘惑した男に對する憤りの心であつた。人々は單純な心から現に私自身すら女に對してまた子供に對して他人に加ふべからざる侮辱を與へてゐる。けれどもこれは不當な侮辱でなければならない。何故なら最も侮辱を加へられなければならない子の父親は誰であるか？彼が自分の子の上に、また子の母親の上にふりかゝる嘲笑と侮蔑を知らぬ顏をして濟ましてゐ、その上に自分の子であることまでも否認しやうとしてゐる何と云ふ破廉恥

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な事であらう。私は男のこの仕打に對して憤りを覺えると共に多くの人々がその父親の誰であるかを知らうとしてゐるその心持ちには彼の許しがたいその罪を誰も責めてはゐないのだ。多くの若い者は皆こんなことをするは當然だと云ふ默許が見える。私たちの目からはそれすら許しがたいことに見える。そして可愛想な母親と子供だけがあらゆる嘲笑と侮蔑をうけるとは何と云ふ不公平なことであらう。若しもそれは委しくたゞしたら全く女は男を愛したかもしれない。併しそれは男の誘惑にまけたのに相異ない。眞に男が女を愛したのならば母と子の受ける侮辱から自分ひとりがのがれると云ふ法はない。それは極めて卑劣な行爲でなければならぬ。眞實の愛は如何なる場合にもそんな卑劣な心を含んではゐない筈である。私はひとりこんなことまで考へてゐた。

「ぢいさん父親も知れないやうな子供なのに『私は孫をひとりもうけました』つて大元氣であるいてゐるのさ」と云ふ言葉を聞いたとき私は人のいゝ顔をしたひげを長くのばしてうすぎたない姿をした老人を思ひ出した。

私は老人の人のいゝそのよろこびを人々と一緒に矢張りいゝ笑草のやうに聞いた。けれども直ぐその輕い侮蔑の心は失せた。そのおぢいさんによつて母と子はとにかく慰められるだらう。私は自然のまゝな人のいゝおぢいさんが孫に對する愛の微笑を快く思ひ浮べ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。
けれども私の心はそれでさつぱりとはしなかつた。私がもうその事を考へ止めやうとした時には、すべての人々の盲目な心に對する輕い不滿と反感が吐息になつて出たのである。物倦い氣持が一杯に私をとりまいた。

（大正四、一〇、二〇）

編輯餘事

▲伊藤野枝さんは廿日頃歸京される筈、次號或は新年號には、新しい計畫をして大に發展される旨書信がありました。

▲平塚さんは四谷南伊賀町四十一に轉居されました。最近の感想として「將來は勉めて讀書と思索に耽り度い、從來はやゝもすれば否定と破壞に傾き過ぎてゐた。これから更に思索を深めて積極的建設に努めればならない。

私共の智識は、時として、不意の出來事に當つて、其れを解釋し批判することの出來ない場合がある。種々なる事變に際して一々批判し得られる樣に智識を廣くして然も深める必要がある、私は近頃、切實に思索を深める必要を感じ出しました。

岩野さんの事件に就いて未だ何も語りません、各方面からいろんな批評が既に出てゐて、私はあきへ殘された樣です、最後に申すとすれば餘程考へればならぬ。何れ、次號か新年號で、精しく書くつもりです」といふてゐられました。多少の聞き誤りがあつたかも知れません。（二十七日係員）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■原稿募集（毎月十日締切）

紙面の許す限りは新しい方のために紙面を割きたいと存じますから御遠慮なく御送り下さい。次號及新年號は早く出したいと存じます、編輯の都合で掲載の遲れることがありますからよくおふくみ置き下さい。

青籍詠草（歌數無制限）。感想及日記（なるべく簡結にすること二十五字詰）。其他。

■伊勢神宮と我國體　廣池千九郎氏著

この書は廣池博士が永年伊勢神宮に奉職して東洋史實を根本的に研究して、我國體の淵源は天祖の御聖德に存する事を證明せられたもので ある。著者の立場は學術的若しくは宗敎的であつ て頗る眞面目な敎育家必讀の名著である事は兩井上博士等の賞讃の辭でよく わかるが、學者以外の我々が讀んでも何かうる所の ある興味の深いものである。

天照大神は御正統を繼がれる事になつて 素盞嗚尊の反對をうけられ、其再三再四の 迫害も皆先方の善いやうに宣まひ殊に神殿に大小便をまり散らしたの なども是は素尊が醉うておいでになるのだと仰せられた程慈悲寛大な御心であらせられた。かうして其迫害の極 まつた時天照は自分の不德のため だと御謹愼の御心で天の岩戸におこもり遊ばした。この慈悲寛大自己反省の 御聖德が我國體の淵源であるといふ。お籠りに付いて日本書紀にある「是に由て慍を發して天石窟に入る……」といふのは支那思想を交へたもので、古事記の「是に於て天照大神畏れて天石屋戸を閉ぢてさしこもります」の畏とあるのは恐怖の意ではない。正しく祝詞や宣明に見える「かしこみかしこみ」と同一の恐惶謹愼であると 思はれると著者は云つてゐる。この外「御祓祓」「我家族制度の特質」「祖先崇拜の國風」「天祖に對する國民的崇拜」等やすべて神社神宮の事は誰が讀んでもよく解る重要記事である。丁度御大典も近づいた今日我婦人の間にもかうい ふ書の弘く讀まれることを望むものである。總洋布製四六二倍版三百頁、二圓（日月社）

■縮入歌集　竹久夢二氏作

すべて私の記憶にある歌で好きなのだけ百首撰んだのでした。歌だけおぼ えてゐて、作者を忘れたのもあるのです。或は歌も原作と違つて覺えてしまつ たものもありはせぬかと氣遣はれるので、わざ と作者の名は書くことにしました。といふ序がある。

夕暮の取り集めたる襦のう ち靜かに人の泣く音聞ゆる
頰に傳ふ涙のごはず 一握の砂を示しし人をわすれず
あしびきの山の雫に妹まつと我たち ぬれぬ山の雫に

何故に戀の初めにかくばかり 悲しきことを君は宣まふ等歌と繪と共にみれば殊に面白い。一圓廿錢（植竹書院）

雜誌規定

■每月一回一日發行

■定價一册金貳拾五錢（郵稅壹錢五厘）

■前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓

■廣告料（一頁）特三十五圓、一等二十圓、二等十五圓、三等十圓、（半頁）七圓

■郵券代用は一錢五厘切手に限る（但し一割增のこと）。

■編輯事務、補助團會費拂込は靑鞜社へ。

■廣告申込、交換廣告は日月社へ。

■涵稿、雜誌交換、購讀に關する一切の事務は日月社へ。

■原稿〆切期日は每月十日限とす。當分の間、日月社內靑鞜係宛のこと。

大正四年十月卅一日印刷納本
大正四年十一月一日發行

禁轉載

東京市小石川區指ヶ谷町九十二番地
靑鞜社內
編輯兼發行人　伊藤野枝

東京市京橋區弓町十三番地
印刷人　柴田杠一郎

東京市京橋區弓町十三番地
印刷所　千代田印刷株式會社

發行所　東京市小石川區指ヶ谷町九十二　靑鞜社
振替東京二一一六番

發賣元　本鄕區元町二丁目廿五　日月社
振替東京二八九一四番

大賣捌　東京堂

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■婦人の開放■女權の擴張■

想界の羅針盤 反響叢書 藝術界の基調

■平塚らいてう女史著

〔『青鞜』讀者は定價の三割引〕

第二編

評論集 現代と婦人の生活

▼四六版三百餘頁・定價八十五錢（送料八錢）

土曜新聞評して曰く

其容貌に於て、其思想に於て、其文才に於て、所謂、新しい女の中の女として最も優れて居るのは雷鳥平塚明子氏である。單に好奇心の眼を以て見るも明子氏は明治の末から大正の時代へかけて世を騷がした名物女の一人であり、更に之を思想上より見れば來る可き何物かを暗示する日本婦人の先驅である。而して本書は、明子氏が世間の侮辱と賞讃との間に立つて奮鬪せる行進曲を集めたるもの、其言論には未だ徹底せざる所もあり、多少奇矯に走るものもないではないが、其大體に於て側々人に逼る力の潛んで居る事は爭ふ事が出來ない。世には食はず嫌いの人が多い。一口に新しい女と言ふ誤られた代名詞に咒はれて、思想界に現はれた傾向を見逃す事があれば、後日必ず悔を貽すに違ひない。

發行所 東京本郷元町 二丁目二十五 日月社 振替東京二八九一四 電話下谷三二〇六

生田長江氏の新論文全集

最近の文藝及び思潮

四六版四百頁
布装美本箱入
金一圓税八錢

著者は權威ある文壇の高等批評家である。文壇の巨星森田草平、島崎藤村、夏目漱石、田山花袋、正宗白鳥の大物を俎に載せて手際よく庖丁目を入れて行く冴えは見上げたものである。著者の頭は鋭いがイラ／＼せず論理的であるがパッションを失はない。加ふるに其筆にデリケートなウィットを滴らしてゐる。尚「不正直なる沈默」以下十數篇は著者の自己及文壇に對する見識の正直且つ大膽なる告白で前の人物評論と合せて最近の文藝及思潮の精髓を窺ふに足る。（世界新聞）

森田草平氏傑作煤煙續編

縮刷 自叙傳

菊判四百餘頁
布装美本箱入
九十錢税八錢

粗き布のポツトリとした装幀なり、此作は云ふまでもなく作者の興味ある生活をさながら打出せるものとして「煤煙」と共に有名なり、安倍能成、阿部次郎兩氏の評を附す。（萬朝）

同じ著者の「煤煙」と共に最も眞面目に一生懸命になつて書いた作で、世をして驚嘆せしめ作者の地位を固めたものである。今や「煤煙特製」と同形同體裁の縮刷となつて現はれた。更に愛讀者を增すことであらう。巻末に著者の友人の評が收めてある。（讀賣新聞）

江部鴨村氏の新研究解説

タゴールの思想及宗教

四六版二百頁
美装優雅箱入
七十錢税八錢

タゴールの思想を消化し問題の要點を把握して自在に之を説明し去つてタゴールの内生命を紹介せんとしたる所は其の特色なり、タゴールを語るもの、中大體を領せんとするものに手頃の書として推薦す。（朝日新聞）

印度の哲人タゴールの思想と宗教との大體を何人にも解るやうに極めて平易明快に説てやがて來朝の噂ある哲人を迎へんとする我讀書界に資し及我等が思想生活を豊富ならしむる一冊たらしめた良書である。（國民新聞）

高濱虚子氏作長編 附錄子規書翰

子規居士と余

四六版三百頁
クロース美本
九十錢税八錢

子規と著者は同じく伊豫の土に生れ同じく俳名を一世に擧げ其交情師弟の如く兄弟の如く親友の如きものあり、著者故人を懷ふ事深く玆に此書あり更に故人の寄せたる書翰百數十通を添へて之に江湖に示せり。（時事）

或時代の生める特異の文學者之を圍繞せる一團の青年と其清き文藝憧憬の念、是等が率直に敍述されてゐる一篇の作品と見るべく子規氏の傳記とも云ふべく而して又一面明治文學史の一部とも稱し得べし。（報知新聞）

發行所 東京本郷元町二丁目二十五（振替東京二八九一四 電話下谷三二〇六）日月社

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十一月特別號

本號に限り 特價卅五錢

科學と文藝

評論

物質的と精神的と……田中王堂
個人主義者の苦痛……長與善郎
盲目の世界……野村隈畔
獨逸人の頭と日本人の頭……三宅博士
科學の立場より見たる東西兩洋の差異……二木博士

創作

無明（長篇小説）　加藤一夫
笑（アルツイバーセフ）　高野孤龍
浮浪（デクイシシイ）　辻潤
金彌（小説）　岡田八千代

科學

解剖學上に於けるゲエテの業績……山川博士
人生と黴菌……羽太ドクトル
宇宙の構造（附錄）……兒玉呂
鳥の哺育時代と其教育……ジョン、クイ
食慾と醫學……小酒井博士

各展覽會批評……
海外思潮……
シングの戲曲……喜多村進
ジプシイの話……辻潤
前月文壇……美川康

挿畫

口各展覽會出品畫
石井柏亭、小杉未醒、中川一政、安井曾太郎、正宗得三郎、佐藤春夫、三井文二、鍋井克之、木村莊八、岸田劉生、田邊至、南薰造、白瀧茂之助、藤島武二、寺崎廣業、池田蕉園
三色版—莊八、西村伊作

詩歌

冬日……よさの、ひろし
雪の國……與謝野晶子
彼等……西村伊作
露景色……長瀬先司
麗白……小林弘
油虫……山野虎市

府下東大久保町二　交響社發行
牛込區四五軒町卅五　振替東京二九五五九　天弦堂發賣

本然生活
（新刊發賣　定價壹圓）
加藤一夫著
洛陽堂發行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一編に付 十錢税二錢

現代百科文庫

五部以上は 郵税不要

新宗教の暗示 宗教叢書

- 宗教の新意義（三編分） 谷本博士
- 神社崇敬と宗教（五編分） 廣池博士
- 宗教入門 江部鴨村
- 神道綱要 西川光次郎
- 救世軍 同
- カラマゾフ兄弟（六編合有） 森田草平
- シヤクンタラ姫 同
- 大聖釋尊 江部鴨村
- 高僧と母 同
- 續高僧と母 同
- 俳聖芭蕉 岡本獸骨
- 道元と親鸞（四編分） 村上博士
- 天理教祖觀（五篇分） 奥谷文智
- 金光教觀 和泉乙三
- 親鸞と法然 村上專精
- 立正安國論略解 柴田一能
- 教祖として見たる天理教 廣池千九郎
- 耶蘇基督 前島潔
- カーライルの宗教 淺海孝一
- 近代思想と宗教 柏原祐義
- 十六羅漢 山邊習學
- オーガスティン論 小宮豊隆

文思叢書 藝潮叢書

名流論作

- ▼父と母と娘（小說） 森田草平
- ▼無用語（評論） 安倍能成
- ▼銀座の夜（小說） 小宮豊隆
- ▼藝術家と藝人（評論） 生田長江
- ▼三十三の死（小說） 素木しづ
- ▼杏の落ちる音（小說） 高濱虚子
- ▼一から四まで（小說） 河東碧梧桐
- ▼文藝評論（評論） 小宮豊隆

古今名著眞髓 梗概叢書

- 神曲 ダンテ 森田草平
- ベル・アミー（發賣禁示） モオパツサン 徳田秋聲
- 懺悔錄 ルーソー 生田長江
- マダム・ボヴリー フローベール 相馬御風
- 死の勝利 ダヌンツイヨ 水上齊
- 英雄崇拜論 カーライル 中村古峽
- ドリアングレー ワイルド 相馬泰三
- 女の一生 モオパツサン 廣津和郎
- 春の眼ざめ ウエデキント 生田長江
- 武器と人 シヨウ 福永挽歌
- ポオラ（外一編） ピネロ 加藤朝鳥
- ファウスト（三編分） ゲーテ 森田草平
- オルレアンの少女 シルレル 水上齊
- アルネ ビヨルンソン 相馬泰三
- 決鬪 クープリン 橋田東聲
- ベルグソンの哲學 牛田艮平

出版圖書目錄進呈 電話下谷三二〇六

日月社

十月中特價目錄進呈 振替東京二八一九一四

振替東京二八九一四番

森田草平作　（好評再版）

入箱菊半截四百頁
布装幀木版七度刷
金九十銭郵税八銭

縮刷 自叙傳

自序より……今「自叙傳」を再び世に送るに就て僅に自ら慰むることが一つある。それは兎に角「煤煙」と共に當時に在ては一生懸命にかいたものだと云ふことである。一生懸命になる、それは今の自分にとつては容易に成れないことである。

本書に對する著者の親友諸氏の合評

安倍能成氏
阿部次郎氏

著者の出世作たる煤煙の姉妹編!!

▲彼の名作「煤煙」に續くべきものとして著者の畢生の力を籠めし當時の内生命の赧白の表現なること今更言ふまでもなし「兎に角煤煙と共に當時にあつては一生懸命に書いたものだ」と著者の言ふ所は偽りなき告白（朝日新聞）

▲世をして驚嘆せしめ、作者の地位を固めたものである。今や「煤煙」と同形の縮刷となつて現れた、更に愛讀者を増すことであらう（讀賣新聞）

▲粗き布のボツトりとした装幀なり、此作は言ふまでもなく作者の興味ある生活をさながら打出せるものとして「煤煙」と共に有名なり（萬朝報）

▲「煤煙」と相並んで文壇を騒がしたる作者得意の作である主人公要吉が山から歸つて女と別れて仕舞つた遣瀬なさに段々と自墮落な生活に沈んで行く徑路が、讀者を壓し付けるやうな、生一本の力で鮮かに畫かれてゐる、「煤煙」に見えてゐる主人公の芝居がかつた遊戯的の氣分が（主人公自分に取ては勿論眞劍なことであつたらうが）次第に無くなつて、いぢらしいほど人間の弱さ果敢なさが現はれてゐる、其れだけ讀者の共鳴をそゝる力が強くなつてゐる、素裸になつた人間の眞實性がしみ〴〵と味はれる、此の意味に於て吾々は「煤煙」よりも「自叙傳」の力が藝術品としても、ヒユーマンドキユーメントとしても、より内容がありより親味があるやうに思はれる（世界新聞）

東京市本郷元町日月社

昭和44年10月30日発行　【第7回配本】

青鞜第5巻　11月号

編著者　平塚らいてう
発行者　藤原正人
発行所　(株)明治文献
印刷　江明印刷
製本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
v.5
no.10

University of Colorado at Boulder
U18304 6746571

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

振替東京二八九一四番

森田草平譯（好評三版）

菊半截六百頁箱入
優雅木版畫七度刷
金九十錢郵稅八錢

カラマゾフ兄弟（附ドストイエフスキイ小傳）

露國の文豪ド氏の最大傑作にして萬人必讀千古不朽の最高文學也!!

『カラマゾフ兄弟』はド氏の大傑作たることは言ふ迄もない。有史以來人類の所産として十指を屈すべき最高の文學で寧ろ經典である。一面露西亞に於ては、カラマゾフ一家の名は、近代の靈肉ともに墮落した陰森な家庭の代名詞とも成つてゐる。譯者の自白に曰く「此書は創作と飜譯とを問はず、從來自分の名に依つて公けに爲れた文學中一番偉大なる味ある作物である」と。

▲人間の心を最も異常なる狀態に置て機一髪の事件を描寫するに巧なる人だけに誰が讀んでも非常に面白き、又貴重なる藝術品なり、譯者はド氏崇拜者なるだけに最適當なる譯者を得たるものと云ふべし（萬朝報）

▲ロシヤ人の心理に深入りして宗教的心境を取扱つたところに於てこの作なぞは宗教家に親しい感じを與へる、かのトルストイが家出のときに携た一書としてもその値打が推される、譯者の手になつた原著者の小傳はこぢんまりとできてる、且つその文學者としての地位と特色とをしのばせる（中外日報）

▲文豪ドストイエフスキーが獨創的な深刻な心理解剖は遺憾なく寫し出されて居る、而して變轉曲折に富む構想は彼れが獨得の擅物であつて飽くまで讀者の感興をそゝらねば止まぬものがある、ドストイエフスキー研究の世界的に盛行する今日この大譯を得たることを喜ばねばならぬ（國民新聞）

東京市本郷元町日月社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明治四十四年八月二十八日第三種郵便物認可　第五巻
大正[illegible]年十[illegible]

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER